

基本計画書

基本計画										
事項		記入欄						備考		
計画の区分		学部・学科の設置								
フリガナ設置者		ガッコウホウジン アイチダイガク 学校法人 愛知大学								
フリガナ大学の名称		アイチダイガク 愛知大学 (Aichi University)								
大学本部の位置		愛知県豊橋市町畑町字町畑1番地の1								
大学の目的		本大学は、教育基本法及び学校教育法並びに本学の設立趣意書に基づき、高い教養と専門的職能教育を施し、広く国際的視野をもって人類社会の発展に貢献しうる人材を養成することを目的とする。								
新設学部等の目的		過去の長い歴史的時間の中における人間や社会のありようやその変遷、人々が生活する地理的空間の存在形態や特質について深く学び、これを基点として、自身でテーマを決め、テキストの読解や現地調査を行って卒業論文を作成し、ものごとを自ら考えて新たなものを創造し表現する力を培う。これらを通して、客観的な視点から人間や社会、風土や環境を眺め、深く理解して、その成果を自らの日常生活や社会生活において応用できる人材を養成する。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又は 称号	開設時期及び 開設年次	所在地		
	文学部 (Faculty of Letters)	年	人	年次 人	人	学士 (文学)	令和3年4月 第1年次	愛知県豊橋市町畑町 字町畑1番地の1		
	歴史地理学科 (Department of History and Geography)	4	70	—	280	(Bachelor of Arts in Humanities)	令和3年4月 第1年次			
	日本語日文学科 (Department of Japanese Language and Literature)	4	48	—	192	学士 (文学)	令和3年4月 第1年次	愛知県豊橋市町畑町 字町畑1番地の1		
計										
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)		令和3年4月 収容定員変更（手続きは省略） 文学部 人文社会学科 [定員減] (△118) (令和3年4月) 日本語日文学科 [定員増] (48) (令和2年4月設置届出予定)								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数					卒業要件単位数			
		講義	演習	実験・実習	計					
文学部 歴史地理学科		213 科目	23 科目	3 科目	239 科目	124 単位				
教員組	学部等の名称		専任教員等						兼任 教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手		
	新設	文学部 歴史地理学科	5 (5)	2 (2)	— (—)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	143 (152)	令和2年4月 設置届出予定
		文学部 日本語日文学科	5 (5)	0 (0)	— (—)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	134 (142)	
		計	10 (10)	2 (2)	— (—)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	277 (294)	
	既設	文学部 人文社会学科	11 (11)	7 (7)	— (—)	1 (5)	19 (23)	0 (0)	89 (89)	
		心理学科	5 (6)	1 (1)	— (—)	1 (2)	7 (9)	0 (0)	34 (34)	
経済学部 経済学科		19 (20)	9 (9)	— (—)	1 (1)	29 (30)	0 (0)	45 (45)		

概 要 の 組 織	設 分	国際コミュニケーション学部 英語学科		6 (6)	4 (4)	— (—)	3 (5)	13 (15)	0 (0)	51 (51)
		国際教養学科		8 (9)	5 (5)	— (—)	2 (3)	15 (17)	0 (0)	48 (48)
		法学部 法学科		14 (15)	11 (11)	— (—)	2 (2)	27 (28)	0 (0)	48 (48)
		経営学部 経営学科		10 (12)	5 (5)	— (—)	1 (1)	16 (18)	0 (0)	57 (57)
		会計ファイナンス学科		10 (11)	5 (6)	— (—)	0 (1)	15 (18)	0 (0)	27 (27)
		現代中国学部 現代中国学科		12 (15)	5 (5)	— (—)	1 (1)	18 (21)	0 (0)	37 (37)
		地域政策学部 地域政策学科		13 (17)	5 (5)	— (—)	3 (3)	21 (25)	0 (0)	41 (41)
		語学教育研究室		0 (0)	0 (0)	— (—)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	— (—)
		共通教育科目等		— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	318 (318)
		計		108 (122)	57 (58)	— (—)	17 (26)	182 (206)	0 (0)	— (—)
		合 計		118 (132)	59 (60)	— (—)	17 (26)	194 (218)	0 (0)	— (—)
教員 以外 の 職 員 の 概 要	職 種		専 任		兼 任		計			
	事 務 職 員		132 (132)		123 (123)		254 (254)			
	技 術 職 員		4 (4)		5 (5)		9 (9)			
	図 書 館 専 門 職 員		12 (12)		17 (17)		29 (29)			
	そ の 他 の 職 員		0 (0)		80 (80)		80 (80)			
	計		148 (148)		225 (225)		372 (372)			
校 地 等	区 分	専 用	共 用		共用する他の 学校等の専用		計			
	校 舎 敷 地	21,698 m ²	96,750 m ²		0 m ²		118,448 m ²			
	運 動 場 用 地	27,199 m ²	72,846 m ²		0 m ²		100,045 m ²			
	小 計	48,897 m ²	169,596 m ²		0 m ²		218,493 m ²			
	そ の 他	2,128 m ²	8,787 m ²		0 m ²		10,915 m ²			
	合 計	51,025 m ²	178,383 m ²		0 m ²		229,408 m ²			
校 舎		専 用	共 用		共用する他の 学校等の専用		計			
		99,160 m ² (99,160 m ²)	29,599 m ² (29,599 m ²)		0 m ² (0 m ²)		128,759 m ² (128,759 m ²)			
教室等	講義室	演習室	実験実習室		情報処理学習施設		語学学習施設			
	122 室	85 室	23 室		19 室 (補助職員 15人)		7 室 (補助職員 5人)			
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称				室 数				
		文学部 歴史地理学科				7 室				
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点			
	文学部 歴史地理学科	43,001 [9,587] (43,001 [9,587])	192 [38] (192 [38])	5 [5] (5 [5])	256 (256)	23,281 (23,281)	16 (16)			
	計	43,001 [9,587] (43,001 [9,587])	192 [38] (192 [38])	5 [5] (5 [5])	256 (256)	23,281 (23,281)	16 (16)			
図 書 館		面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数				
		12,783 m ²		1,745		1,252,335				
体 育 館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要						
		7,175.63 m ²		テニスコート7面、プール1面、ゴルフ練習場1面、弓道場						

経費の見積り方法及持の概要	経費の積み	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	共同研究費等は学部全体	
		教員1人当り研究費等		500千円	500千円	500千円	500千円	—	—		
		共同研究費等		11,330千円	11,330千円	11,330千円	11,330千円	—	—		
		図書購入費	1,986千円	2,185千円	2,185千円	2,185千円	2,185千円	—	—		
	設備購入費	5,453千円	6,133千円	6,133千円	6,133千円	6,133千円	—	—			
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
	1,140千円	960千円	960千円	970千円	—千円	—千円					
学生納付金以外の維持方法の概要				私立大学等経常費補助金、雑収入等							
既設大学等の状況	大学の名称		愛知大学								平成30年度入学定員減（△55人） 平成30年度設置届出（定員55人） 平成30年4月名称変更
	学部等の名称		修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	文学部		年	人	年次人	人		倍			
	人文社会学科		4	290	—	1,215	学士(文学) 学士(社会学)	1.20	平成17年度	愛知県豊橋市町畑町字町畑1番地の1	
	心理学科		4	55	—	165	学士(心理学)	0.64	平成30年度	同上	
	経済学部										
	経済学科		4	330	—	1,320	学士(経済学)	1.14	平成元年度	愛知県名古屋市市中村区平池町4丁目60番6	
	国際コミュニケーション学部										
	英語学科		4	115	—	460	学士(外国語)	1.13	平成10年度	同上	
	国際教養学科		4	115	—	460	学士(国際教養学)	1.12	平成10年度	同上	
	法学部										
	法学科		4	315	—	1,260	学士(法学)	1.13	平成元年度	同上	
	経営学部										
	経営学科		4	250	—	1,000	学士(経営学)	1.12	平成元年度	同上	
	会計ファイナンス学科		4	125	—	500	学士(経営学)	1.18	平成元年度	同上	
現代中国学部											
現代中国学科		4	180	—	720	学士(現代中国学)	1.13	平成9年度	同上		
地域政策学部											
地域政策学科		4	220	—	880	学士(地域政策学)	1.17	平成23年度	愛知県豊橋市町畑町字町畑1番地の1		
大学の名称		愛知大学大学院									
学部等の名称		修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
法学研究科		年	人	年次人	人		倍				
公法学専攻 博士後期課程		3	3	—	9	博士(法学)	0.00	平成13年度	愛知県名古屋市市中村区平池町4丁目60番6		
私法学専攻 博士後期課程		3	5	—	15	博士(法学)	0.00	昭和38年度	同上		

経済学研究科	経済学専攻 博士前期課程 (修士課程)	2	15	—	30	修士(経済学)	0.00	昭和28 年度	同上	令和元年12月届出 (△10人)
	経済学専攻 博士後期課程	3	5	—	15	博士(経済学)	0.00	昭和53 年度	同上	
	経営学研究科									
	経営学専攻 博士前期課程 (修士課程)	2	15	—	30	修士(経営学)	0.43	昭和52 年度	同上	
	経営学専攻 博士後期課程	3	5	—	15	博士(経営学)	0.00	昭和54 年度	同上	
	中国研究科									
	中国研究専攻 博士前期課程 (修士課程)	2	15	—	30	修士(中国研究)	0.53	平成3年 度	同上	
	中国研究専攻 博士後期課程	3	15	—	45	博士(中国研究)	0.59	平成6年 度	同上	
	国際コミュニケーション研究科									
	国際コミュニケーション専攻 修士課程	2	15	—	30	修士(国際コミュニケーション)	0.23	平成14 年度	同上	
	文学研究科									
	日本文化専攻 博士前期課程 (修士課程)	2	10	—	20	修士(日本文化)	0.20	平成3年 度	愛知県豊橋市町畑 町字町畑1番地の1	
	日本文化専攻 博士後期課程	3	2	—	6	博士(日本文化)	0.00	平成6年 度	同上	
	地域社会システム専攻 博士前期課程	2	10	—	20	修士(地域社会システム)	0.00	平成3年 度	同上	
	地域社会システム専攻 博士後期課程	3	2	—	6	博士(地域社会システム)	0.00	平成5年 度	同上	
	欧米文化専攻 博士前期課程 (修士課程)	2	10	—	20	修士(欧米文化)	0.00	平成3年 度	同上	
	欧米文化専攻 博士後期課程	3	2	—	6	博士(欧米文化)	0.00	平成6年 度	同上	
	法務研究科									
	法務専攻 専門職学位課程	3	20	—	60	法務博士(専門職)	0.40	平成16 年度	愛知県名古屋市東 区筒井二丁目10番 31号	
大 学 の 名 称		愛知大学短期大学部								
学 部 等 の 名 称		修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定 員 超過率	開設 年度	所 在 地	
ライフデザイン総合 学科		年	人	年次 人	人	短期大学士 (ライフデザイン総合)	倍			
ライフデザイン総合 学科		2	100	—	200	短期大学士 (ライフデザイン総合)	1.21	平成17 年度	愛知県豊橋市町畑 町字町畑1番地の1	
附属施設の概要										

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学又は高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。

教育課程等の概要														
(文学部 歴史地理学科)														
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
共通教育科目	英語	Communicative English I	1前	1		○								兼4
		Communicative English II	1後	1		○								兼4
		Reading I	1前	1		○								兼5
		TOEIC	1後	1		○								兼5
		Practical English I	2前	1		○								兼7
		Practical English II	2後	1		○								兼7
		Reading II	2前	1		○								兼8
		Reading III	2後	1		○								兼8
		Current English I	2前		2	○								兼1
		Current English II	2後		2	○								兼1
		Communication Skills I	1・2・3・4		2	○								兼2
		Communication Skills II	1・2・3・4		2	○								兼2
		Communication Skills III	1・2・3・4		2	○								兼1
		Communication Skills IV	1・2・3・4		2	○								兼1
	中国語	入門中国語 I	1前		1	○								兼5
		入門中国語 II	1後		1	○								兼5
		基礎中国語 I	1前		1	○								兼5
		基礎中国語 II	1後		1	○								兼5
		応用中国語 I	2前		1	○								兼4
		応用中国語 II	2後		1	○								兼4
		総合中国語 I	2前		1	○								兼1
		総合中国語 II	2後		1	○								兼1
		中国語会話（初級） I	1前		1	○								兼1
		中国語会話（初級） II	1後		1	○								兼1
		中国語会話（中級） I	2前		1	○								兼1
		中国語会話（中級） II	2後		1	○								兼1
		コミュニケーション中国語 I A	3前		2	○								兼1
		コミュニケーション中国語 I B	3後		2	○								兼1
	フランス語	入門フランス語 I	1前		1	○								兼1
		入門フランス語 II	1後		1	○								兼1
		基礎フランス語 I	1前		1	○								兼2
		基礎フランス語 II	1後		1	○								兼2
		応用フランス語 I	2前		1	○								兼2
		応用フランス語 II	2後		1	○								兼2
		総合フランス語 I	2前		1	○								兼1
		総合フランス語 II	2後		1	○								兼1
		フランス語会話（初級） I	1前		1	○								兼1
		フランス語会話（初級） II	1後		1	○								兼1
		フランス語会話（中級） I	2前		1	○								兼1
		フランス語会話（中級） II	2後		1	○								兼1
		コミュニケーションフランス語 I A	3前		2	○								兼1
		コミュニケーションフランス語 I B	3後		2	○								兼1
	ドイツ語	入門ドイツ語 I	1前		1	○								兼1
		入門ドイツ語 II	1後		1	○								兼1
		基礎ドイツ語 I	1前		1	○								兼2
		基礎ドイツ語 II	1後		1	○								兼2
		応用ドイツ語 I	2前		1	○								兼1
		応用ドイツ語 II	2後		1	○								兼1
		総合ドイツ語 I	2前		1	○								兼1
		総合ドイツ語 II	2後		1	○								兼1

科目 区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
外国語分野 共通教育科目	ドイツ語	ドイツ語会話（初級）Ⅰ	1前		1		○								兼1	
		ドイツ語会話（初級）Ⅱ	1後		1		○								兼1	
		ドイツ語会話（中級）Ⅰ	3前		1		○								兼1	
		ドイツ語会話（中級）Ⅱ	3後		1		○								兼1	
	ロシア語	入門ロシア語Ⅰ	1前		1		○								兼1	
		入門ロシア語Ⅱ	1後		1		○								兼1	
		基礎ロシア語Ⅰ	1前		1		○								兼1	
		基礎ロシア語Ⅱ	1後		1		○								兼1	
		応用ロシア語Ⅰ	2前		1		○								兼1	
		応用ロシア語Ⅱ	2後		1		○								兼1	
		総合ロシア語Ⅰ	2前		1		○								兼1	
		総合ロシア語Ⅱ	2後		1		○								兼1	
	韓国・朝鮮語	入門韓国・朝鮮語Ⅰ	1前		1		○								兼2	
		入門韓国・朝鮮語Ⅱ	1後		1		○								兼2	
		基礎韓国・朝鮮語Ⅰ	1前		1		○								兼2	
		基礎韓国・朝鮮語Ⅱ	1後		1		○								兼2	
		応用韓国・朝鮮語Ⅰ	2前		1		○								兼2	
		応用韓国・朝鮮語Ⅱ	2後		1		○								兼2	
		総合韓国・朝鮮語Ⅰ	2前		1		○								兼1	
		総合韓国・朝鮮語Ⅱ	2後		1		○								兼1	
	ポルトガル語	入門ポルトガル語Ⅰ	1前		1		○								兼1	
		入門ポルトガル語Ⅱ	1後		1		○								兼1	
		基礎ポルトガル語Ⅰ	1前		1		○								兼1	
		基礎ポルトガル語Ⅱ	1後		1		○								兼1	
	日本語	日本語・表現Ⅰ	1前		1		○								兼1	
		日本語・表現Ⅱ	1後		1		○								兼1	
		日本語・論文技術（基礎）Ⅰ	1前		1		○								兼1	
		日本語・論文技術（基礎）Ⅱ	1後		1		○								兼1	
		日本語・総合Ⅰ	2前		1		○								兼1	
		日本語・総合Ⅱ	2後		1		○								兼1	
		日本語・論文技術（応用）Ⅰ	2前		1		○								兼1	
		日本語・論文技術（応用）Ⅱ	2後		1		○								兼1	
		アカデミック日本語Ⅰ	3前		2		○								兼1	
		アカデミック日本語Ⅱ	3後		2		○								兼1	
		ビジネス日本語Ⅰ	3前		2		○								兼1	
		ビジネス日本語Ⅱ	3後		2		○								兼1	
		外国理解	世界の言語Ⅰ	2前		2		○								兼2
	世界の言語Ⅱ		2後		2		○								兼2	
	ラテン語Ⅰ		2・3・4		2		○								兼1	
	ラテン語Ⅱ		2・3・4		2		○								兼1	
	ギリシャ語Ⅰ		2・3・4		2		○								兼1	
	ギリシャ語Ⅱ		2・3・4		2		○								兼1	
	海外セミナーⅠ		1・2・3・4		2		○								兼1	
	海外セミナーⅡ		1・2・3・4		2		○								兼1	
	海外セミナーⅢ		1・2・3・4		2		○								兼1	
	海外セミナーⅣ		1・2・3・4		2		○								兼1	
	外国理解Ⅰ		1・2・3・4		2		○								兼1	
	外国理解Ⅱ		1・2・3・4		2		○								兼1	
	外国理解Ⅲ		1・2・3・4		2		○								兼1	
	外国理解Ⅳ		1・2・3・4		2		○								兼1	
	小計（104科目）		—	8	128	0	—			0	0	0	0	0	兼51	—
	数理・情報分野	教養数学	1・2・3・4		2		○								兼1	
		数理科学	1・2・3・4		2		○								兼1	
		確率入門	1・2・3・4		2		○								兼1	
		統計入門	1・2・3・4		2		○								兼1	
		情報倫理	1・2・3・4		2		○								兼1	
		マルチメディア表現	1・2・3・4		2		○								兼2	

科目 区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通教育科目	数理・情報分野	ネットワーク演習	1・2・3・4		2			○								兼1	
		社会データ分析入門	1・2・3・4		2		○								兼1		
		プログラミング	1・2・3・4		2			○							兼3		
		情報の科学	1・2・3・4		2		○								兼1		
		情報と社会	1・2・3・4		2		○								兼1		
		情報総合演習	1・2・3・4		2			○							兼5		
		小計（12科目）	—	0	24	0	—			0	0	0	0	0	兼14		
	自然分野	物質の科学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		地球の科学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		宇宙の科学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		生命の科学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		環境の科学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		科学技術史	1・2・3・4		2		○									兼1	
		現代技術と社会	1・2・3・4		2		○									兼1	
		地球環境問題	1・2・3・4		2		○									兼2	
		自然環境と地理	1・2・3・4		2		○									兼1	
		動物行動学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		健康科学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		スポーツ工学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		トレーニング科学	1・2・3・4		2		○									兼1	
	小計（13科目）	—	0	26	0	—			0	0	0	0	0	兼11			
	社会分野	歴史学	1・2・3・4		2		○				1					兼2	
		考古学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		地理学	1・2・3・4		2		○				1					兼1	
		社会学	1・2・3・4		2		○									兼2	
		政治学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		経済学	1・2・3・4		2		○									兼2	
		法学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		経営学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		憲法学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		レクリエーション論	1・2・3・4		2		○									兼1	
		ジェンダー論	1・2・3・4		2		○									兼2	
		小計（11科目）	—	0	22	0	—			0	2	0	0	0	兼14		
	人文分野	哲学	1・2・3・4		2		○									兼2	
		論理学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		宗教学	1・2・3・4		2		○									兼2	
		心理学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		文化人類学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		現代の思想	1・2・3・4		2		○									兼2	
		民俗学	1・2・3・4		2		○									兼3	
		スポーツ文化論	1・2・3・4		2		○									兼1	
		日本事情Ⅰ	1・2・3・4		2		○									兼1	
		日本事情Ⅱ	1・2・3・4		2		○									兼1	
		文学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		日本語学	1・2・3・4		2		○									兼1	
		古典の世界	1・2・3・4		2		○									兼4	
		言語と文化	1・2・3・4		2		○									兼2	
		芸術論	1・2・3・4		2		○									兼1	
		小計（15科目）	—	0	30	0	—			0	0	0	0	0	兼21		
	総合	総合科目	1・2・3・4		2		○									兼1	オムニバス・共同（一部）
		総合演習	2・3・4		2			○								兼1	
		キャリアデザイン基礎	1後		2		○									兼1	
		キャリアデザイン応用	2前		2		○									兼3	
		キャリアデザイン特殊講義	2・3・4		2		○									兼1	
	小計（5科目）	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	兼6	—		

科目 区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通教育科目	分野育	スポーツ・健康演習	1後	2				○							兼11	※実技、オムニバス	
		スポーツ実技Ⅰ	2・3・4		1				○						兼5		
		スポーツ実技Ⅱ	2・3・4		1				○						兼4		
	小計（3科目）		—	2	2	0	—			0	0	0	0	0	兼12	—	
専門教育科目	学部共通科目	文学部総合研究	1前	2				○			1	2				兼12	オムニバス・共同（一部）
		卒業論文	4通	8					○		5	2					
		入門講義（現代文化）	1前		2			○								兼5	オムニバス・共同（一部）
		入門講義（社会学）	1前		2			○								兼1	
		入門講義（心理学）	1前		2			○								兼2	オムニバス
		入門講義（歴史・地理学）	1前		2			○		4	2						
		入門講義（日本語日本文学）	1前		2			○								兼2	オムニバス・共同（一部）
		入門講義（欧米言語文化）	1前		2			○								兼4	
		入門演習（東アジア文化）	1後		2				○							兼1	オムニバス
		入門演習（哲学）	1後		2				○							兼1	
		入門演習（図書館情報学）	1後		2				○							兼1	
		入門演習（メディア芸術）	1後		2				○							兼2	
		入門演習（社会学）	1後		2				○							兼4	
		入門演習（心理学）	1後		2				○							兼4	
		入門演習（日本史学）	1後		2				○	3							
		入門演習（世界史学）	1後		2				○	1	1						
		入門演習（地理学）	1後		2				○		1						兼2 兼4
		入門演習（日本語日本文学）	1後		2				○								
		入門演習（欧米言語文化）	1後		2				○								
	小計（19科目）		—	10	34	0	—			5	2	0	0	0	兼28	—	
	演習科目	歴史・地理学演習Ⅰ	2前	2					○		5	2					
		歴史・地理学演習Ⅱ	2後	2					○		5	2					
		歴史・地理学演習Ⅲ	3前	2					○		5	2					
		歴史・地理学演習Ⅳ	3後	2					○		5	2					
		歴史・地理学演習Ⅴ	4前	2					○		5	2					
		歴史・地理学演習Ⅵ	4後	2					○		5	2					
		小計（6科目）		—	12	0	0	—			5	2	0	0	0		
	基幹科目	歴史・地理学特殊講義A	2前		2			○			1						兼1
		歴史・地理学特殊講義B	2前		2			○			1						
		歴史・地理学特殊講義C	2前		2			○			1						
		歴史・地理学特殊講義D	2前		2			○									
		歴史・地理学特殊講義E	2前		2			○		1							
		歴史・地理学特殊講義F	2前		2			○			1						
		歴史・地理学特殊講義G	2前		2			○									
		歴史・地理学特殊講義H	2前		2			○									
		日本史学講読A	2前	2				○		1							兼1 兼1 兼1 兼1
		日本史学講読B	2前	2				○		1							
		日本史学講読C	2前	2				○		1							
		世界史学講読Ⅰ	2前	2				○		1	1						
		世界史学講読Ⅱ	2後	2				○		1	1						
		世界史学講読Ⅲ	3前	2				○		1	1						
		世界史学講読Ⅳ	3後	2				○		1	1						
		地理学講読	2前	2				○			1						
		地理学フィールドワーク実習	2通	2					○	1	1						兼1
		地域分析	2前	2				○									
		地図学	2後	2				○			1						
	小計（19科目）		—	22	16	0	—			5	2	0	0	0	兼6	—	
	展開科目	歴史学総論	1後		2			○			4	1					兼1 兼1 兼1 集中
		地理学総論	1後		2			○		1							
		歴史学史	2前		2			○									
		外国考古学Ⅰ	2前		2			○									
		外国考古学Ⅱ	2後		2			○									
		歴史地理学	2前		2			○			1						

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
専門教育科目	展開科目	自然地理学	2前		2		○			1							
		日本史史料学	2前		2		○									兼1	
		日本考古学Ⅰ	2前		2		○									兼1	
		日本考古学Ⅱ	2後		2		○									兼1	
		日本文化史Ⅰ	2前		2		○									兼1	
		日本文化史Ⅱ	2後		2		○									兼1	
		日本民俗学	2前		2		○									兼1	
		ヨーロッパ文明史Ⅰ	2前		2		○									兼1	
		ヨーロッパ文明史Ⅱ	2後		2		○									兼1	
		芸術史	2後		2		○									兼1	
	小計（16科目）		—	0	32	0	—			5	2	0	0	0	兼9	—	
	関連科目	博物館概論	2前		2		○									兼2	
		教育方法論	2前		2		○									兼1	
		社会科・地歴科教育法	2前		2		○									兼1	
		社会科・公民科教育法	2前		2		○									兼1	
		社会科教育法	2前		2		○									兼1	
	小計（5科目）		—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	兼5	—	
	他学部科目	GIS概論	1前		2		○									兼2	
		まちづくりとデータ分析	2前		2		○									兼1	
		地域資源論	3前		2		○									兼1	
		英米の地域と文化	2前		2		○									兼1	
		多文化共生論	3前		2		○									兼1	
	小計（5科目）		—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	兼4	—	
教職課程科目	日本史	1前			2	○									兼1		
	外国史	1前			2	○									兼1		
	地理学通論	1前			1	○				1							
	地誌学	1前			1	○				1							
	政治学概論	1前			2	○									兼1		
	法学概論	1前			2	○									兼1		
小計（6科目）		—	0	0	10	—			0	1	0	0	0	兼4	—		
合計（239科目）		—	54	344	10	—			5	2	0	0	0	兼157			
学位又は称号		学士(文学)							学位又は学科の分野					文学関係			
卒業要件及び履修方法									授業期間等								
(1) 共通教育科目 44単位以上 a 外国語分野 第1外国語8単位、第2外国語6単位の計14単位必修 b 数理・情報分野2単位、自然分野4単位、社会分野4単位、人文分野4単位の計14単位必修 c 上記（1）bの各分野及び総合全体の中から計14単位必修 d 体育分野 2単位必修									1学年の学期区分					2学期			
									1学期の授業期間					15週			
									1時限の授業時間					90分			
(2) 専門教育科目 62単位以上																	
a 日本史学専攻																	
イ 学部共通科目 14単位必修（文学部総合研究2単位、卒業論文8単位、入門講義2単位以上、入門演習2単位以上）																	
ロ 演習科目 12単位必修																	
ハ 基幹科目 14単位必修																	
ニ 展開科目 8単位必修																	
ホ 関連科目																	
ヘ 上記（2）aイ、ハ、ニ、ホ及び他学科科目の中から 14単位必修																	
b 世界史学専攻																	
イ 学部共通科目 14単位必修（文学部総合研究2単位、卒業論文8単位、入門講義2単位以上、入門演習2単位以上）																	
ロ 演習科目 12単位必修																	
ハ 基幹科目 16単位必修																	
ニ 展開科目 8単位必修																	
ホ 関連科目																	
ヘ 上記（2）bイ、ハ、ニ、ホ及び他学科科目の中から 12単位必修																	

別記様式第2号（その2の1）

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
c 地理学専攻														
イ 学部共通科目 14単位必修（文学部総合研究2単位、卒業論文8単位、入門講義2単位以上、入門演習2単位以上）														
ロ 演習科目 12単位必修														
ハ 基幹科目 16単位必修														
ニ 展開科目 8単位必修														
ホ 関連科目														
ヘ 上記（2）cイ、ハ、ニ、ホ及び他学科科目の中から 12単位必修														
(3) 上記（1）共通教育科目、（2）専門教育科目（教職課程科目を除く）の中から 18単位以上														
(履修科目の登録の上限：44単位（年間）)														

授業科目の概要			
（文学部 歴史地理学科）			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	英語	
	Communicative English I	国際社会において活躍できるような高度な英語能力を身につけるために、発信的言語能力（話す書く技能）に中心を置いて指導する。英語での伝達ができるように、大学生としての英語基礎力を確実なものとする。このため、クラスのサイズも25名程度とし、学生が少しでも多くの発信的活動ができるように工夫する。英語による積極的なコミュニケーションスキルを身に付け、さまざまな状況で英語を使うときの自信を高め、さまざまな規模のグループで快適に話すことができることを目指す。	
	Communicative English II	国際社会において活躍できるような高度な英語能力を身につけるために、発信的言語能力（話す書く技能）に中心を置いて指導する。「Communicative English I」での学習を基礎として英語での発表ができるように、大学生としての英語応用力を身につける。このため、クラスのサイズも25名程度とし、学生が少しでも多くの発信的活動ができるように工夫する。英語による積極的なコミュニケーションスキルを身に付け、さまざまな状況で英語を使うときの自信を高め、さまざまな規模のグループで快適に話すことができることを目指す。	
	Reading I	国際化・情報化時代に対応できる実践的な実用英語を修得させる。世界にアクセスできる英語運用能力として識字能力と伝達能力をつけるためには、いわゆる和訳読解授業に陥ることなく多様な言語活動を教授者が用意する必要がある。入学後の英語テストによってクラスを能力別に編成とし、各レベルにあった教材と教授法によって総合的英語力を養成する。中級レベルにおいては、英語読み物に偏ることのない総合的テキストを統一的に利用しながら、それぞれの教授者が独自性を発揮し指導する。	
	TOEIC	国際化・情報化時代に対応できる実践的な実用英語を修得させる。特に、TOEICを念頭において授業展開を考える。これまで学んだ英語運用力を基礎として、さらにより実用的な英語力を養成することをねらいに、リスニング力をつけるため、テープなどによるリスニング練習だけでなく音読とシャドウイングなどを組み合わせ総合的に行う。また、TOEICの問題形式に添ったソフトを使用し、e-learningを行う。全員にTOEICを11月末に受験させ到達目標を明確にさせる。	
	Practical English I	国際化・情報化時代に対応できる実践的な実用英語を修得させる。世界にアクセスできる英語運用能力として識字能力と伝達能力をつけるためには、いわゆる和訳読解授業に陥ってはならない。英語を聞いたり書いたり発表したりなど多様な言語活動を教授者が用意する必要がある。前年度のTOEICの結果をもとに能力別に編成し、各レベルにあった教材と教授法によってそれぞれの教授者が独自性を発揮しながら総合的英語力を養成する。	
	Practical English II	国際化・情報化時代に対応できる実践的な実用英語を修得させる。「Practical English I」での学習を基礎として、世界にアクセスできる英語運用能力として識字能力と伝達能力をつけるためには、いわゆる和訳読解授業に陥ってはならない。英語を聞いたり書いたり発表したりなど多様な言語活動を教授者が用意する必要がある。学習者が何らかの到達目標を定め自宅学習に臨むことは語学教育においてきわめて重要である。その目標はより具体的に学習者に示すほうが理解しやすい。	
	Reading II	世界にアクセスできる英語運用能力として識字能力と伝達能力をつけるためには、いわゆる和訳読解授業に陥ることなく多様な言語活動を教授者が用意する必要がある。確かな英語読解力を身につけるために、精読とあわせ可能な限り多読の指導も行うこと、時事的な内容も含め多種多様な英文に触れさせることに注意を払って講義を展開する。前年度のTOEICの結果をもとに能力別に編成し、各レベルにあった教材と教授法によってそれぞれの教授者が独自性を発揮しながら総合的英語力を養成する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	英語	ReadingⅢ	世界にアクセスできる英語運用能力として識字能力と伝達能力をつけるためには、いわゆる和訳読解授業に陥ることなく多様な言語活動を教授者が用意する必要がある。「ReadingⅡ」の学習を基礎として、さらに確実な英語読解力を身につけさせるために、精読とあわせ可能な限り多読の指導も行う。また、時事的な内容も含め多種多様な英文に触れさせることに注意を払って講義を展開する。本クラスは、能力別に編成し、各レベルにあった教材と教授法によってそれぞれの教授者が独自性を発揮しながら総合的英語力を養成する。	
			Current English I	英語の実践的な能力を身につけるためには、「時事英語」も極めて重要である。特に本学部のように現代の社会に則した英語に触れるためには、英字新聞雑誌 (Time や Newsweek) や英米の英語放送 (New York Times や Japan Times、BBC のオンライン・ニュース) を題材として利用する必要がある。また、海外での実際のビジネスに必要な技能としての英語にも配慮しながら授業を展開する。学生は様々な活動、グループワーク、そしてプレゼンテーションを通してできるだけ英語を聞いて話すことが求められる。グループワークのために、学生は新聞記事を読み、様々な人々と話すことが必要となる。	
			Current English II	「Current English I」の学習を基礎として、英語のより実践的な能力を身につけることが重要である。特に本学部のように現代の社会に則した英語に触れるためには、英字新聞雑誌 (Time や Newsweek) や英米の英語放送 (New York Times や Japan Times、BBC のオンライン・ニュース) を題材として利用する必要がある。また、海外での実際のビジネスに必要な技能としての英語にも配慮しながら授業を展開する。学生は様々な活動、グループワーク、そしてプレゼンテーションを通してできるだけ英語を聞いて話すことが求められる。グループワークのために、学生は新聞記事を読み、様々な人々と話すことが必要となる。	
			Communication Skills I	レベル別としては中級 (下) にあたる。少人数で行うため、発信型の英語力をより伸ばすことを狙いとする。そのために、必ず英語で話したり書いたりする要素を含めて授業を展開する。テキストに読解が含まれていてもよいが、話したり書いたりする言語活動につながるものでなければならない。できる限り多様な言語活動を通じて英語を学ぶ意義を把握し、英語の運用能力を高め、TOEIC500 点以上を目指す。受講生の積極的な授業参加が必要となる。	
			Communication Skills II	レベルとしては中級 (上) にあたる。少人数で行うため、発信型の英語力をより伸ばすことを狙いとする。そのために、必ず英語で話したり書いたりする要素を含めて、授業を展開していく。テキストに読解が含まれていてもよいが、話したり書いたりする言語活動につながるものでなければならない。できる限り多様な言語活動を通じて英語を学ぶ意義を把握し、英語の運用能力を高め、TOEIC550 点以上を目指す。受講生の積極的な授業参加が必要となる。	
			Communication SkillsⅢ	レベルとしては上級 (下) にあたる。少人数で行うため、より発信型の英語力をより伸ばすことを狙いとする。そのために、授業は、必ず英語で話したり書いたりする要素を含めて展開する。テキストに読解が含まれていてもよいが、話したり書いたりする言語活動につながるものでなければならない。できる限り多様な言語活動を通じて英語を学ぶ意義を把握し、英語の運用能力を高め、TOEIC600 点以上を目指す。受講生の積極的な授業参加が必要となる。	
			Communication SkillsⅣ	レベルとしては上級 (上) にあたる。少人数で行うため、より発信型の英語力をより伸ばすことを狙いとする。そのために、授業は、必ず英語で話したり書いたりする要素を含めて展開する。テキストに読解が含まれていてもよいが、話したり書いたりする言語活動につながるものでなければならない。できる限り多様な言語活動を通じて英語を学ぶ意義を把握し、英語の運用能力を高め、TOEIC650 点以上を目指す。受講生の積極的な授業参加が必要となる。	
	中国語		入門中国語 I	中国語の基礎は発音で、その目標は中国式ローマ字＝ピンインで書かれた音節表をすべて正しく読めることである。一つの音節は一つの漢字に対応している。したがってピンインが正しく読めれば、漢字そして単語が読め、そして文がつけられることになる。中国語は単語に変化がないので、単語をいかに並べるかがつぎの課題＝文法になる。「入門中国語 I」では簡単なあいさつ表現を中心に学びながら、同時に名詞、数詞、動詞、形容詞文等基礎的な文法を学ぶ。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	中国語	入門中国語Ⅱ	「入門中国語Ⅱ」では発音の基礎を固めるとともに、数字の表現、日時、曜日、買い物の常用表現、ことばの話題、天気の話、友だちの家を訪問する等場面別の表現をより広く学ぶ。文法としては場所、対象を表す前置詞、能力、願望、当為を表す助動詞、結果補語、方向補語、可能補語等各種の補語の基本的用法、動詞の連用（連動式、兼語式）、比較の前置詞を使った比較表現、同等表現を学ぶとともに、仮定・条件、因果関係、逆説等の接続詞を含む複文のいくつかを学ぶ。	
			基礎中国語Ⅰ	基礎中国語は入門中国語を補完しながら進めていくもので、中国式ローマ字＝ピンインで書かれた音節表をすべて正しく読めるとともに、音声を聞いてこれをピンインに変換することができるよう練習する。基礎中国語では、簡単なあいさつ表現を学びながら、場所や対象を表す前置詞、能力・願望を表す助動詞についても紹介する。また、習った単語をいかに並べていくかという語順についても、日本語、英語との違いに留意して理解させるようにする。	
			基礎中国語Ⅱ	「基礎中国語Ⅱ」では、発音の基礎を固め、ピンインと実際の音声との乖離現象にも注意しながら、聞いた中国語をピンインでも書けることを目指す。場面別の表現を広く学ぶとともに、文法としてはテンス・アスペクト（了、着、在）、経験、基本的な結果補語、方向補語、可能補語等各種の補語にも慣れ、中国語らしい表現を学ぶようにする。さらに、動詞の連用のいくつかのタイプ（連動式、兼語式）を学ぶとともに、複文の中国語にもふれるようにする。	
			応用中国語Ⅰ	応用中国語は主にネイティブの教師による授業である。入門・基礎で学んだ文法事項、単語を踏まえながら、発音の基礎をより強固なものにするとともに、中国人教師とのやりとりを通し実際に中国語を使い、また具体的ないくつかの場面を通して、習ったことを口頭でも言えるように練習し、実際に使えるレベルまでを目指す。文法事項としては、方向補語の派生義、目的、逆接、添加、除外等の接続詞を学ぶことで、より複雑な文が理解できることをめざす。	
			応用中国語Ⅱ	応用中国語は主にネイティブの教師による授業である。「応用中国語Ⅰ」をふまえ、その基礎の上に、さらに高度な口頭表現ができるようにする。口頭表現を自分のものにするには、暗唱とともに中国人教師との実際の会話を通し、通じる中国語、使える中国語を修得するようにしなくてはならない。また、離合詞や動詞フレーズ、慣用句、より多くの結果補語、方向補語の基本的な派生義の表現をたくさん覚え、中国語らしい中国語がしゃべれることを目指す。	
			総合中国語Ⅰ	「総合中国語Ⅰ」では、主に講読の授業を行う。日本において中国語によるコミュニケーション力をつけるためには、文字で書かれたものを通しより多くの中国語をインプットする必要がある。そのため、中国の社会と文化がわかるような読み物を中心に、辞書を引きながら中国語で書かれた文章を読めるよう訓練をする。語彙を増やすため、適宜分野別の語彙を提示する。文法的には程度、時間、頻度を表す副詞、慣用句、目的、逆接、添加、除外等の複文の学習に重点を置く。	
			総合中国語Ⅱ	「総合中国語Ⅱ」では、主に講読の授業を行う。日本において中国語によるコミュニケーション力をつけるためには、文字で書かれたものを通しより多くの中国語をインプットする必要がある。「総合中国語Ⅱ」では、「総合中国語Ⅰ」をふまえ、中国の社会と文化を反映した読み物を辞書を引きながら読む中で、読解力を高め、同時に中国の社会を知る一助とする。語彙を増やすため、適宜分野別の語彙を提示するほか、文法的には程度、時間、頻度を表す副詞、離合詞、慣用句、目的、逆接、添加、除外等の複文の学習に重点を置く。	
			中国語会話（初級）Ⅰ	基礎中国語、入門中国語と連動するもので、日本人教師から習った発音の説明をふまえ、発音を矯正、確立させる。学習者が出会うであろう、出会い、遊び、学習、買い物、病気、言語等々場面別の基本的な表現を学び、これを実際に使えるレベルを目指す。語彙を増やすため、基本単語集の学習を勧めるほか、分野別の語彙の習得も目指す。文法的には程度、時間、頻度を表す類義的な副詞、離合詞、慣用句、目的、逆接、添加、除外等の複文の学習に重点を置く。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	中国語	中国語会話（初級）Ⅱ	「中国語会話（初級）Ⅰ」をふまえ、発音の矯正、強化に常に注意を払いながら、少しでも長い文を会話できるようにする。「中国語会話（初級）Ⅱ」では「中国語会話（初級）Ⅰ」をふまえ、旅行、料理、誕生祝い、ハイキング等の場面を通し、そういう場で必要な中国語表現を学習できるようにする。語彙を増やすため、習った文章から単語を品詞別に抜き出したり、分野別の語彙を調べさせたりする。文法的には程度、時間、頻度を表す類義的な副詞、離合詞、慣用句、目的、逆接、添加、除外等の複文の学習に重点を置く。	
		中国語会話（中級）Ⅰ	授業の大半は中国語で行う。発音の矯正、強化につねに注意を払うとともに、語彙力を増やし、慣用句、成語等にも親しみ、中国人の発想を知るとともに、それらを少しでも使えるよう務める。履修者は自分のことを少しでも中国語で表現できるとともに、実際に会うであろう多くの場面での基本的な表現を学ぶこととなる。文法的には、類義的な副詞、接続詞、助動詞、動詞、形容詞を学ぶ他、類義的な結果補語についても注意を促す。		
		中国語会話（中級）Ⅱ	授業の大半は中国語で行う。「中国語会話（中級）Ⅰ」をふまえ、履修者は自分の言いたいことを少しでも中国語で表現できることを目指すとともに、常用語句、文型を自由に使えるよう文作りの練習をし、簡単な自由作文も書けることを目指す。また、日常のできごとを中国語で書き、中国人教師の添削を受けるとともに、それを教室で口頭発表できるようにする。文法的には、類義的な副詞、接続詞、助動詞、動詞、形容詞を学ぶほか、紛らわしい結果補語についても注意を促す。		
		コミュニケーション中国語ⅠA	授業はすべて中国語で行う。中国語で書かれた現代中国の世相、文化を扱った話題を読みながら、それについて中国語で質問をしたり、自分の意見を言えるようなコミュニケーション能力の養成をめざす。また、常用語句、文型については、これを使えるよう、文づくりの練習をする。併せてテレビドラマを視聴し、それについての感想を書いたり言えることを目指す。文法的には結果補語や方向補語の派生義を自由に使えること、また、二つ以上の文をつないで言えるような訓練をする。		
		コミュニケーション中国語ⅠB	授業はすべて中国語で行う。中国語で書かれた現代中国が抱える様々な問題についての小説、エッセイ、ルポルタージュ、新聞の文章を読みながら、それについて中国語で質問をしたり、自分の意見を言えるようなコミュニケーション能力の養成をめざす。また、常用語句、文型については、これらを使って文づくりの練習をする。併せて、テレビドラマを視聴し、リスニング力を高めるとともに、それについて感想を述べたり、書いたりすることを目指す。		
		コミュニケーション中国語ⅡA	この時間は主に中国語で書かれた文章を細かく読む訓練を行う。コミュニケーション能力を養うには、なにより多くのインプットが必要であるが、日本にいてそれを行うにはどうしても書いたものを多く読む必要がある。ここでは中国語で書かれた文章を独力で正確に読めるようになるための訓練を行う。中国語では一つ一つの文がどうつながっているか、どうかかわっているかを読み取る必要がある。そこで、この時間では、各種の辞書を徹底して引く訓練をするともに、文のつながり、構造が理解できるような授業をめざす。		
		コミュニケーション中国語ⅡB	この時間は主に中国語で書かれた文章を細かく読む訓練を行う。コミュニケーション能力を養うには、なにより多くの中国語をインプットする必要があるが、日本に住んでいてそれを行うにはどうしても書いたものを多く読む必要がある。中国語で書かれた文章を辞書の力に頼りながらも独力で正確に読めるようになるための訓練を行う。新語は一般の辞書にはないことが多いので、新語辞典を紹介するほか、インターネット（特に百度）で検索する訓練も指導する。		
	フランス語	入門フランス語Ⅰ	この授業は、フランス語の初心者に向けたもので、フランス語の最初歩（自己紹介、あいさつ、自分や家族についての表現）を身につけることを目標とする。具体的には、自己紹介、挨拶、自分の好みを表現すること、及び、家族、持ち物、住んでいる場所、好み、等に関する簡単な質問をすることを学ぶ。また、レッスンと関係する文化的側面も授業で扱う。授業形態は、毎回、見本として簡単な会話文を利用して、発音を練習し、語彙と文法を習得するというもので、それに続いて、会話と筆記の問題練習を行う。		

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	フランス語	入門フランス語Ⅱ	この授業は、フランス語の初心者に向けたもので、フランス語の初歩（自分について、また自分の経験や予定についての表現）を身につけることを目標とする。今学期は、特に自分に関する情報（スポーツ、日常生活、アルバイト等）をあたえること、また、自分の経験や予定について語ることを学ぶ。レッスンと関係する文化的側面も授業で扱う。授業形態は、毎回、見本として簡単な会話文を利用して、発音を練習し、語彙と文法を習得するというもので、それに続いて、会話と筆記の問題練習を行う。	
			基礎フランス語Ⅰ	この授業は、「入門フランス語Ⅰ」と連動し、これを側面から応援するとともに、フランス語の初級文法の骨組みを理解することを目指すものである。春学期は、その最初歩の習得を行い、文字、発音から始まって「現在」の事象について理解、表現できることを目標とする。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解いたり、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、フランス語の最基礎を習得することを目指す。	
			基礎フランス語Ⅱ	この授業は、「入門フランス語Ⅱ」と連動し、これを側面から応援するとともに、フランス語の初級文法を理解することを目指すものである。秋学期は、その初歩の習得を行い、「現在」のみではなく「過去」や「未来」に関する事象についても理解、表現できることを目標とする。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解いたり、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、フランス語の基礎を習得することを目指す。	
			応用フランス語Ⅰ	この授業は、1年生で入門および基礎フランス語を履修した学生に向けたもので、初級フランス語を習得した後に、更にステップアップした語学能力を取得させるために、フランス語の基礎の確認と補足を行う。初級文法をさらに推し進め、簡易なフランス語の文章が読める程度の語学力獲得を目指す。授業形態は、フランスに関する文章を、辞書を用いて読解してもらうとともに、練習問題を解くことによってフランス語初級文法の確認と復習をする。また、フランスの文化や習俗についても学び理解を深める。	
			応用フランス語Ⅱ	春学期、「応用フランス語Ⅰ」で身につけた、初級フランス語からさらにステップアップした語学能力に基づいて、本格的な中級程度のフランス語習得を目指す。初級文法をさらに推し進め、通常のフランス語の文章が読める程度の語学力獲得を目指す。授業形態は、フランスに関する文章を、辞書を用いて読解してもらうとともに、練習問題を解くことによってフランス語中級文法を習得する。さらに広くフランス文化一般についても知見を広げ、またプレゼンテーション能力も身に付けさせる。	
			総合フランス語Ⅰ	この授業は、1年生で入門および基礎フランス語を履修し、さらに、「応用フランス語Ⅰ・Ⅱ」及びこの授業に続く「総合フランス語Ⅱ」と合わせて、フランス語で8単位の修得をめざす学生に向けたものである。「読む」「書く」「聴く」「話す」という語学の4技能について、総合的にトレーニングし、コミュニケーション能力の基礎を修得する。具体的には、1年生で身につけた知識をより強固なものとし、コミュニケーションの各場面を自分のものにする。（原則としてフランス語による授業とする）	
			総合フランス語Ⅱ	この授業は、春学期「応用フランス語Ⅰ」「総合フランス語Ⅰ」を履修し、さらに「応用フランス語Ⅱ」と合わせて、フランス語で8単位の取得をめざす学生に向けたものである。「読む」「書く」「聴く」「話す」という語学の4技能について、総合的にトレーニングし、コミュニケーション能力の基礎を修得する。具体的には、春学期に「総合フランス語Ⅰ」で身につけた基礎をより強固なものとし、会話力のみならず文章力も身につけるようにする。（原則としてフランス語による授業とする）	
			フランス語会話（初級）Ⅰ	この授業は、「入門フランス語Ⅰ」及び「基礎フランス語Ⅰ」を補って、口頭でのコミュニケーション能力を身につけようとする学生のために設けられた、週3コマ目のフランス語の選択クラスである。口頭で言いたいことを伝えるための最初歩を習得する。春学期は、とりわけ挨拶や短いやり取りなどの最基礎を、少人数クラスであることを生かして、徹底的な発音練習によって自分のものとする。（フランス語による授業とする）	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	フランス語	フランス語会話（初級）Ⅱ	この授業は、「入門フランス語Ⅱ」及び「基礎フランス語Ⅱ」を補って、口頭でのコミュニケーション能力を身に付けようとする学生のために設けられた、週 3 コマ目のフランス語の選択クラスである。口頭で言いたいことを伝えるための初歩を習得する。秋学期は、とりわけ簡単なやり取りなどの基礎を、少人数クラスであることを生かして、徹底的な口頭練習によって自分のものとする。書き言葉は練習問題の形でわずかに登場する。（フランス語による授業とする）	
			フランス語会話（中級）Ⅰ	この授業は「応用フランス語Ⅰ」及び「総合フランス語Ⅰ」を補って、口頭でのコミュニケーション能力を身に付けようとする学生のために設けられた、週 3 コマ目のフランス語の選択クラスである。会話や遊びを通したコミュニケーションや口頭表現に重点を置き、最も簡単な言葉でフランス語圏の人と交流できることを目標とする。春学期は、とりわけ1年生で身に着けた知識を会話で使えるように強固なものとし、練習によって流暢さを身につける。また声調のトレーニングもする。（フランス語による授業とする）	
			フランス語会話（中級）Ⅱ	この授業は「応用フランス語Ⅱ」及び「総合フランス語Ⅱ」を補って、口頭でのコミュニケーション能力を身に付けようとする学生のために設けられた、週 3 コマ目のフランス語の選択クラスである。会話や遊びを通したコミュニケーションや口頭表現に重点を置き、簡単な言葉でフランス語圏の人と交流できることを目標とする。秋学期は、とりわけ生の資料やシャンソンを通してより柔軟な会話力を身に着ける。また、ペアあるいは3人で会話を作ったり、小発表を個人やグループでしたりする。（フランス語による授業とする）	
			コミュニケーションフランス語ⅠA	この授業は、これ以前に、既に4学期間フランス語の授業を受けた学生を対象とし、コミュニケーションを通してコミュニケーションを学ぶ。春学期の目標は、自分の身の回りのことについて簡単な表現ができることで、学生は非常に多様なシチュエーションをマスターしなければならない。問題に対して見解を示して自分の言うことを理解させ、さらにネイティブの言うことを理解せねばならない。この点で、文化的な文脈を身に着けることができる生の資料（映画、新聞記事等）は大切である。	
			コミュニケーションフランス語ⅠB	この授業は、これ以前に、既に5学期間フランス語の授業を受けた学生を対象とし、コミュニケーションを通してコミュニケーションを学ぶ。秋学期はより広く抽象的なテーマを扱い、さらに一人一人の意見を要求する。秋学期は、個人あるいはグループでの発表、前もって書き下ろした会話を用い、クラス内で相互反応を引き起こして、口頭表現に向けて学習者を導いてゆく。この授業の目標は口頭表現ではあるが文章表現もおろそかにはできない。	
			コミュニケーションフランス語ⅡA	〔この授業は、「コミュニケーションフランス語ⅠA」と連動し、併せて週2回の集中コースを構成する。〕この授業は、これ以前に、既に4学期間フランス語の授業を受けた学生を対象とし、コミュニケーションを通してコミュニケーションを学ぶ。春学期の目標は、自分の身の回りのことについて簡単な表現ができることで、学生は非常に多様なシチュエーションをマスターしなければならない。問題に対して見解を示して自分の言うことを理解させ、さらにネイティブの言うことを理解せねばならない。この点で、文化的な文脈を身に着けることができる生の資料（映画、新聞記事等）は大切である。	
			コミュニケーションフランス語ⅡB	〔この授業は、「コミュニケーションフランス語ⅠB」と連動し、併せて週2回の演習の集中コースを構成する。〕この授業は、これ以前に、既に5学期間フランス語の授業を受けた学生を対象とし、コミュニケーションを通してコミュニケーションを学ぶ。秋学期はより広く抽象的なテーマを扱い、さらに一人一人の意見を要求する。秋学期は、個人あるいはグループでの発表、前もって書き下ろした会話を用い、クラス内で相互反応を引き起こして、口頭表現に向けて学習者を導いてゆく。この授業の目標は口頭表現ではあるが文章表現もおろそかにはできない。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	ドイツ語	入門ドイツ語Ⅰ	ドイツ語の初学者を対象に、日常会話程度の基礎的なドイツ語コミュニケーション能力を身につけることを目指す。また言語の学習を通して、ドイツの文化や生活への理解を深める。まず、ドイツ語の正しい発音、アクセントを繰り返し練習する。その後、日常の挨拶、簡単な自己紹介から始めて、大学での専攻の説明、さらに自分の好み（趣味や食べ物など）や自分の家族について、簡単なドイツ語で表現することを学ぶ。グループやパートナー練習を中心に授業を行う。	
			入門ドイツ語Ⅱ	ドイツ語の初学者を対象に、日常会話程度の基礎的なドイツ語コミュニケーション能力を身につけることを目指す。また言語の学習を通して、ドイツの文化や生活への理解を深める。「入門ドイツ語Ⅰ」で習得した初歩的なドイツ語の会話能力をもとに、引き続きドイツ語の基礎的口語表現を学んでいく。ドイツ語の正しい発音やアクセントの練習を繰り返しながら、自分の持ち物や住居について、さらに週末や休暇の過ごし方等についてドイツ語で表現することを学ぶ。グループやパートナー練習を中心に授業を行う。	
			基礎ドイツ語Ⅰ	ドイツ語の初学者を対象に、ドイツ語の基礎となる文法知識の習得を目指す。また言語の学習を通じて、ドイツの文化や生活への理解を深める。まず、ドイツ語の正しい発音やアクセントを練習した後、動詞の人称変化や名詞の格変化を繰り返し口頭で練習し、基礎的な変化を身につける。内容をよく理解したうえで、できるだけ多くの練習問題を解くことで、ドイツ語の基本的な力を養う。また、文法の進度に合わせて、辞書を用いて平易なドイツ語の文章を読む練習もする。	
			基礎ドイツ語Ⅱ	ドイツ語の初学者を対象に、ドイツ語の基礎となる文法知識の習得を目指す。また言語の学習を通じて、ドイツの文化や生活への理解を深める。「基礎ドイツ語Ⅰ」で習得した初級文法の知識をもとに、動詞の三基本形や、過去形、完了形などの重要な文法事項を学ぶ。内容をよく理解したうえで、できるだけ多くの練習問題を解くことで、ドイツ語の基本的な力を養う。また、文法の進度に合わせて、やや複雑なドイツ語の文章や、ある程度まとまった量のドイツ語を、辞書を用いながら読む練習をする。	
			応用ドイツ語Ⅰ	ドイツ語の初級者を対象に、ドイツ語を読む、書く、聞く、話すといった総合的な運用能力の習得を目指す。また言語の学習を通じて、ドイツの文化や生活への理解を深める。1年次において修得したドイツ語の基礎的語学能力を一層確実なものにするため、授業では、練習問題など文法の復習も出来るだけ行いながら、ドイツ語の言語構造への理解をも深めていきたい。また基礎的な会話表現にもできるだけ多く触れて、口頭練習を繰り返すことで、自分の言いたいことを簡単なドイツ語で表現できるようにする。	
			応用ドイツ語Ⅱ	ドイツ語の初級者を対象に、ドイツ語を読む、書く、聞く、話すといった総合的な運用能力の習得を目指す。また言語の学習を通じて、ドイツの文化や生活への理解を深める。「応用ドイツ語Ⅰ」に引き続き、1年次において修得したドイツ語の基礎的語学能力を一層確実なものにするため、授業では、練習問題など文法の復習も出来るだけ行いながら、中級ドイツ語学習への橋渡しをする。また基礎的な会話表現にもできるだけ多く触れて、口頭練習を繰り返すことで、さらなるレベルアップをはかる。	
			総合ドイツ語Ⅰ	総合ドイツ語は、ドイツ語を第1外国語に選択した学生を対象とする授業である。この授業では、読む、書く、聞く、話すという語学の4技能のうち、なかでも「話す」ことに重点をおき、ドイツ語を使うことによって基礎力を養成することを目標とし、少しずつドイツ語で「できる」ことを増やしていく。文法知識の定着だけでなく、簡単なドイツ語で発信する、簡単なドイツ語で書かれた情報を読み取る力をつけていく。ペアワーク、グループワークを多く取り入れる。	
			総合ドイツ語Ⅱ	総合ドイツ語は、ドイツ語を第1外国語に選択した学生を対象とする授業である。この授業では、読む、書く、聞く、話すという語学の4技能のうち、なかでも「話す」ことに重点をおき、ドイツ語を使うことによって基礎力を養成することを目標とし、少しずつドイツ語で「できる」ことを増やしていく。文法知識の定着だけでなく、簡単なドイツ語で発信する、簡単なドイツ語で書かれた情報を読み取る力をつけていく。国内・外のドイツ語検定試験の受験に向けての準備となる授業である。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	ドイツ語	ドイツ語会話（初級）Ⅰ	ドイツ語の基礎的会話能力の習得を目指す。「ドイツ語の聞き取り能力の向上」「日常的な会話の運用能力が身につく」「異文化を理解する能力が身につく」をテーマに、それを実現するためのDVD教材を用いた授業となる。ドイツの語学研修に参加した主人公と一緒に、ドイツ到着から、日常生活における様々な場面（ホストファミリーや語学学校でのやりとり、レストランや郵便局など）を取り上げ、基礎的で自然なドイツ語の言い回しを学ぶ。アクティブな会話演習を中心に授業を行う。	
			ドイツ語会話（初級）Ⅱ	ドイツ語の基礎的会話能力の習得を目指す。「ドイツ語の聞き取り能力の向上」「日常的な会話の運用能力が身につく」「異文化を理解する能力が身につく」をテーマに、それを実現するためのDVD教材を用いた授業となる。「ドイツ語会話（初級）Ⅰ」に引き続き、ドイツの語学研修に参加した主人公と一緒に、日本へ帰国するまでの、日常生活における様々な場面（商店、医院、駅、ホテル、空港など）を取り上げ、基礎的で自然なドイツ語の言い回しを学ぶ。	
			ドイツ語会話（中級）Ⅰ	CD教材を用いた学習を通して、まず、聞き取り能力の向上と日常的な会話の運用能力を身につけること、さらに、異文化体験を通してドイツの文化の理解をふかめることを目指す。1・2年次で習得した日常会話程度の基礎的なドイツ語コミュニケーション能力をさらに深め、文字に頼ることなくドイツ語が話せるように、アクティブな会話演習を中心に授業を行う。天気をめぐるやり取りや、日常生活における様々な場面（駅、レストラン、ホテル、街中、病院など）を取り上げ、自然なドイツ語の言い回しを学ぶ。	
			ドイツ語会話（中級）Ⅱ	CD教材を用いた学習を通して、まず、聞き取り能力の向上と日常的な会話の運用能力を身につけること、さらに、異文化体験を通してドイツの文化の理解をふかめることを目指す。「ドイツ語会話（中級）Ⅰ」に引き続き、1・2年次で習得した日常会話程度の基礎的なドイツ語コミュニケーション能力をさらに深め、文字に頼ることなくドイツ語が話せるように、アクティブな会話演習を中心に授業を行う。招待された時のやり取りや、人物に関する説明、さらには、ごみと環境などの社会的なテーマについて自分の意見をドイツ語で述べることを学ぶ。	
	ロシア語		入門ロシア語Ⅰ	初級中級レベルの外国語の学習者は、自分が会話において使えない表現や語彙は聞き取れない。よって、この「入門ロシア語Ⅰ」では、音声訓練を重視し、語学の運用能力を身につけるために必要なロシア語の音声・発音の基礎を習得することを目指す。簡単な疑問文とその受け答えのパターン構文を用いながら、人間に関する語彙、曜日などの時間関係表現、身の回りにある物をはじめとする基本語彙を覚え、キリル文字の発音やロシア語における文のイントネーション・パターンを習得する。	
			入門ロシア語Ⅱ	「入門ロシア語Ⅰ」で学習したロシア語の文字と発音練習を基礎として、自分のことをロシア語で話すために必要な表現や語彙をさらに増やしていく。特定のテーマを設定し、テーマごとにパターン構文を用いながら、年齢表現、家族についての表現、時間・時刻表現、場所表現、動作表現などの表現や語彙を習得していく。さらに進め、好悪の表現、身体・心理状態の表現、依頼の仕方、許可を得る・与える表現などについても学び練習を繰り返す。授業が練習だけに終わらないように、ロシアや時にはロシアの文化の紹介なども行う。	
			基礎ロシア語Ⅰ	ロシア語は、英語と同じインド・ヨーロッパ言語語族に属する言語であるが、英語以外の他のヨーロッパ言語と同じく、すでに英語が失ってしまった言語特徴を多く保っている。よって、文法学習は、ロシア語習得への近道となる。「基礎ロシア語Ⅰ」では、英語や日本語の文法と比較しながら、ロシア語のキリル文字と発音の規則、名詞の性と数の区別、形容詞をはじめとする名詞を修飾する語、動詞の活用（現在形・過去形）およびその未来表現といった文法事項を理解することを目指す。	
			基礎ロシア語Ⅱ	この科目では、「基礎ロシア語Ⅰ」に引き続いて、英語や日本語の文法と比較しながら、ロシア語の初級文法を学習する。まず、再帰動詞（—ся 動詞）の活用（現在形・過去形）およびその未来表現を学習した後、6格（主格・生格・与格・対格・造格・前置格）について学習する。6格は、日本語の助詞に対応する意味機能を担っており、特に重要な文法事項である。例文と練習問題を通して、6格のそれぞれの用法を理解し、その語尾変化を覚えることを目指す。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	ロシア語	応用ロシア語Ⅰ	「応用ロシア語Ⅰ」では、形容詞の格変化とその用法および動詞の体や命令形についての文法事項を学習し、ロシア語初級文法の学習を完成させる。そして、ロシア語はヨーロッパ言語の中でも語尾変化が多い言語であるため、辞書で単語を引くことに慣れる必要がある。辞書を使用できるようになるために、ロシア語の 6 格の使い方に慣れ、文法表の見方を修得し、辞書と活用表を使用しながらであれば、ロシア語の簡単なテキストが読めるようになることを目指す。同時に、ロシア文化を紹介する時間も持つ予定である。	
			応用ロシア語Ⅱ	テキスト講読は、外国人が語彙を増やすための近道であるが、語尾変化の多いロシア語では、辞書の標記の仕方について学習する必要がある。この科目では、辞書における、不規則変化の標記の仕方や、また、その語が何格と共に用いられるのかといった格支配の標記の仕方を学習する。加えて、関係代名詞や移動動詞や数詞が絡む文法事項を学習し、辞書と活用表を使用しながら、複雑な構文を含む中級レベルのテキストを読むことができることを目指す。また、ロシア文化を紹介する時間も持つ予定である。	
			総合ロシア語Ⅰ	「総合ロシア語Ⅰ」では、「入門ロシア語Ⅰ・Ⅱ」と「基礎ロシア語Ⅰ・Ⅱ」で学んできた文法知識と語彙や表現を再確認しながら、ロシア語の運用能力をさらに高めていく。この授業では、特に「聞く活動」と「話す活動」を中心に進めていきながら、人・もの・食・音楽・スポーツ・絵画といったテーマの語彙を増やすことを目指す。そして、自己紹介や家族紹介をはじめとして、「自分のことについて話すことができる！」を目標において授業をすすめていく。	
			総合ロシア語Ⅱ	この科目では、「総合ロシア語Ⅰ」に引き続いて、「聞く活動」と「話す活動」を中心に進めていきながら、ロシア語の運用能力を高めていく。特定の場面（道案内、市場、お店、レストラン、郵便局、劇場など）を設定し、それらの場面で使われる語彙や表現を増やすことを目指す。「入門ロシア語Ⅰ・Ⅱ」、「基礎ロシア語Ⅰ・Ⅱ」で学んできた文法知識と語彙や表現を再確認しながら、「様々な場面で自分の意思を伝えることができる！」を目標において授業をすすめていく。	
	韓国・朝鮮語		入門韓国・朝鮮語Ⅰ	韓国は日本にとって最も近い国で、経済面及び文化面でもこの地域と密接な関係にある。最初にきわめて合理的に作られたハングル文字を学び、同時に視聴覚機器を利用しながらその発音を練習する。具体的には、子音字、激音、濃音、合成母音字、終声音、二文字の終声音などを繰り返し聞いたり発音したりして、練習を繰り返す。前半の「文字と発音編」では、韓国・朝鮮語の文字と発音をしっかりと身につけ、次のステップ「読む・聞く・書く・話す」のための土台づくりをする。後半の「会話と文法編」では、インプットとアウトプットをバランス良く並行し、自然と身につく韓国語、使える韓国語を目指す。	
			入門韓国・朝鮮語Ⅱ	韓国・朝鮮語の学習においてハングル文字は最初の大難関である。「入門韓国・朝鮮語Ⅰ」の集中的な文字及び発音の練習を基礎として、ハングル文字がある程度読めるようになった段階で、いろいろな場面における簡単な会話を練習する。日常での挨拶、買い物でのやりとり、レストランでの簡単な注文など場面設定を行い、リスニングを含めた練習を繰り返す。授業が単調な練習だけに終わらないように、韓国大衆文化（映画・音楽・飲食など）の紹介なども行う。	
			基礎韓国・朝鮮語Ⅰ	韓国・朝鮮語の基礎を学ぶ上で、韓国・朝鮮語の文法は不可欠である。韓国・朝鮮語の語順は日本語の語順と酷似しているため、それを理解した上で韓国・朝鮮語の言語的特徴について学ぶ。正確な発音を身につけるため初期の学習から必ず音声教材を用い、日本語にない発音、発音の変化について単語を覚える際に意識して練習することが必要になる。文法を修得するためにテキストに従い、初歩的な文法事項を学び、各種練習問題をこなしながら同時に基本語彙を修得する。また、時には簡単な読み物を読み、韓国人やその文化への理解を深める。	
			基礎韓国・朝鮮語Ⅱ	韓国・朝鮮語の語順は日本語の語順と酷似しているため、それを理解した上で韓国・朝鮮語の言語的特徴について学ぶ。基本的な文の構造と表現力を養うのに重点をおきますができるだけ学生諸君の五感をすべて使いこなす授業を目指す。「基礎韓国・朝鮮語Ⅰ」の学習を基礎にして、あらたまった丁寧な表現、うちとけた丁寧な表現や尊敬形（韓・日の敬語の違いに注目）などについて詳しく学ぶ。文法を修得するためにテキストに従い各種練習問題をこなしながら、随時、簡単な読み物を読み、韓国人やその文化への理解を深める。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	韓国・朝鮮語	応用韓国・朝鮮語Ⅰ	基礎の完成と運用能力（「読む」「書く」「聞く」「話す」）の向上を目指す。韓国・朝鮮語の基礎的な理解力、及び運用能力の養成を目標とします。授業内容としては、テキストをもとに、用言の活用など基本文法の習熟と口頭表現力、聴解力、文章の読解力、作文能力等を養成していく。正確な発音を身につけるためには初期の学習から必ず音声教材を用い、日本語にない発音を単語、語句、文章を覚える際に意識して練習することが必要になる。	
			応用韓国・朝鮮語Ⅱ	さらなる運用能力（「読む」「書く」「聞く」「話す」）の向上を目指す。「応用韓国・朝鮮語Ⅰ」の授業内容の継続で韓国・朝鮮語の基礎知識を確実なものとし、さらに語学力を向上させることを目標に授業を行う。用言の活用の変化の習熟に重点を置き、活用形のうち連用形、連体形をベースにした様々な表現の作り方、使い方に慣れ親しむことをポイントにする。演習に積極的な参加を促すことで、読み聞きを通じた理解力だけでなく、会話の実践感覚をも向上させ、究極的に韓国・朝鮮語能力全体に磨きをかける。	
			総合韓国・朝鮮語Ⅰ	ハングルの読み書きができ、韓国語の基礎を終えた学習者を対象に、韓国語で日常コミュニケーションをとるうえで必要な語彙・文法表現を学習する。具体的に、場面（値段を聞きものを注文する場面、交通手段の利用・道案内する場面など）に応じて必要な語彙・文法表現を修得し、また2～3人が一組になって練習するなどして、韓国語コミュニケーション能力を向上させる。さらに、テキストの内容だけではなく、韓国の人々の生活や文化についても知識を深める。	
			総合韓国・朝鮮語Ⅱ	「総合韓国・朝鮮語Ⅰ」の授業内容の継続で、韓国語で日常コミュニケーションをとるうえで必要な語彙・文法表現を学習する。具体的に、場面（相手に提案する場面、相手を誘う場面など）に応じて必要な語彙・文法表現を修得し、また2～3人が一組になって練習するなどして、韓国語コミュニケーション能力を向上させる。さらに、テキストの内容だけではなく、韓国の人々の生活や文化についても知識を深める。リスニングとスピーキングを習得するため、CDも活用する。	
	ポルトガル語		入門ポルトガル語Ⅰ	愛知県三河地区及び静岡県浜松地区においてはブラジル人が多く働いている。このため、この地域の多方面において活躍することが期待される人材には、ポルトガル語の基礎知識が必要となることも多い。入門ポルトガル語では、最初に、視聴覚機器を利用しながら発音を中心に学ぶ。日本語とは異なる文字と発音との関係について正しい理解をした上で、数字・時間・曜日・日付などの基本語彙について学んでいく。ポルトガル語における文字、アルファベット、発音及びアクセントからはじまり、数詞、時間、日付、指示詞、所有代名詞、単数形・複数形、形容詞、前置詞、疑問詞、動詞の活用法等、一つのフレーズを作成する為のパーツを一つずつ学びながら基礎的語学能力を身につける	
			入門ポルトガル語Ⅱ	「入門ポルトガル語Ⅰ」のポルトガル語の文字と発音練習を基礎として、いろいろな場面における簡単な会話を練習する。日常での挨拶、買い物でのやりとり、レストランでの簡単な注文など場面設定を行い、発音・ヒアリング・読みの訓練を行う。さらに進め、天気・季節に関する表現、家族の者を指すときの表現、身体・心理状態の表現、依頼の仕方、許可を得る・与える表現などについても学びを進める。練習だけに終わらないように、ブラジルや時にはポルトガルの文化の紹介なども行う。	
			基礎ポルトガル語Ⅰ	ポルトガル語の基礎を学ぶ上で、ポルトガル語の文法は不可欠である。ポルトガル語はインド・ヨーロッパ言語族イタリック語派に属す。したがって、最初は、ポルトガル語の言語的特徴について学ぶ。特に、主語と動詞（過去形・現在形・未来形）、主語と動詞（人物以外の主語のとき）、主語と動詞（進行形）などを中心に、テキストに従い各種練習問題をこなす。また、これらの文法事項を定着させるために、時には簡単な読み物を読んだり、簡単な映像を鑑賞したりする。	
			基礎ポルトガル語Ⅱ	「基礎ポルトガル語Ⅰ」で、文の根幹である主語と動詞について学んだ。「基礎ポルトガル語Ⅱ」では、疑問詞、名詞及び形容詞、指示詞、所有代名詞などから、少し高度な文法事項について説明し、テキストに従い各種文法練習問題をこなしながらの定着を図る。簡単な発話もできるようにする。また、「基礎ポルトガル語Ⅰ」と同様、簡単な読み物や映像の生きたポルトガル語の場面を参考に、文法事項の定着を図る。さらには、その言語を話す人たちやその文化への理解を深めることまでを目標とする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	日本語	日本語・表現Ⅰ	外国人留学生履修科目。自己表現活動を通して自己実現を図ることを目的とする。そのためには、キャンパスでの講義を理解するための日本語の読み・書きの能力だけでなく、キャンパス外でも、異文化接触体験を通して自己を確立する能力を培っていくことも狙いとする。従って、授業で扱うトピックは現実社会を反映したものを選定し、内容をしっかり深めた上で、インターアクション活動が可能となるよう展開していく。外国人留学生にとって日本語は外国語ではなく、まさに生活言語そのものである。この観点から少数授業を保证していく。	
			日本語・表現Ⅱ	外国人留学生履修科目。自己表現活動を通して自己実現を図ることを目的とする。「日本語・表現Ⅰ」に継続して基礎文型とその応用文型を体系的に学習する一方で、秋は特に各授業のレポートや論文作成に対応できるよう、日本語の書く力を重点的に身につけていくことを図る。教材以外のトピックとしては、新聞記事を各自が選定し、その内容の理解を深めることによって、感想文を書くことを義務付ける。さらに、新聞の論旨や自分の意見をクラスで発表し、クラス内討議へと発展できるレベルにまで高める。	
			日本語・論文技術（基礎）Ⅰ	外国人留学生履修科目。大学が提供する多様な講義・演習科目から、高度な情報や知識を的確に得ることができるよう、論理的思考に基づいたアカデミック・リテラシーの獲得を目指す。そのために論理的な文章を大量に徹底的に読みこなす。同時に、文法能力の基礎固めも行う。春学期は、特に、文法項目としては、「助詞」「形式名詞」「複合動詞」など日本語独自の特色ある部分を確認する。また、文章の構成力拡充のために、「句読点」「記号や符号」「段落わけ」などもタスク活動を通して学習していく。	
			日本語・論文技術（基礎）Ⅱ	外国人留学生履修科目。「日本語・論文技術（基礎）Ⅰ」同様、大学が提供する多様な講義・演習科目から、高度な情報や知識を得ることができるよう、論理的思考に基づいたアカデミック・リテラシーの獲得を目指す。そのために論理的な文章を大量に徹底的に読みこなす。同時に、文法能力も発展的体系的に獲得する。具体的には、「日本語・論文技術（基礎）Ⅱ」では、主・術の関係や、文の構成、接続語関係、論文の構成など、文、文体、文章、談話単位などの枠組での日本語の姿を捉える。日本語力の低い学生への補充指導もあわせて行う。	
			日本語・総合Ⅰ	外国人留学生履修科目。1年次の「日本語・表現Ⅰ・Ⅱ」授業を発展させる。まず第一に、テキスト・資料を使って、アカデミックなレベルでの論理的表現の修得を体系的に目指す。同時に、様々な投げ込みタスクを通して、日々の生活において、自己の置かれている状況を説明し、自らの手で問題解決にあたることのできる社会的総合的な日本語力も養う。また、各自の興味・関心をもった社会的テーマでアンケート活動をし、それを、レジュメ（グラフを含む）にまとめて、発表しクラス内討議に持ち込む。	
			日本語・総合Ⅱ	外国人留学生履修科目。「日本語・総合Ⅰ」に継続して、論理的表現の修得並びに発表能力を高めることをめざす。まず、テキスト・資料から、アカデミックなレベルでの論理的表現やグラフの説明・分析の表現を拡充する。同時に、秋学期も、様々なタスクを通して、日々の生活において、自己の置かれている状況を説明し、自らの手で問題解決にあたることのできる社会的総合的な日本語力も養う。必修日本語として最後のセメスターであることから、資格試験に挑戦することも促す。	
			日本語・論文技術（応用）Ⅰ	「日本語・論文技術（基礎）Ⅰ・Ⅱ」で獲得した論理的な文章のリーディング・リテラシーをさらに磨いていくだけでなく、書くためのスキルの向上も徹底する。特に「文体」「文作法の技法」「文構成」の分野で「日本語・論文技術（基礎）Ⅰ・Ⅱ」で修得したことが定着するよう図る。同時に日本語の文法体系を応用・実践できるよう確かなものに高めていく。また、要約やレジュメ作りの基礎も固めていく。夏の長期休暇等にも課題を出し、授業のない期間でも日本語で思考しコミュニケーションすることを日常化させ、秋学期にその復習をし、定着を図る。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	日本語	日本語・論文技術（応用）Ⅱ	1年次の「日本語・論文技術（基礎）Ⅰ・Ⅱ」で獲得した論理的な文章のリーディング・リテラシーを引き続き磨いていくだけでなく、書くためのスキルの向上も徹底する。特に文系理系の論文を各種読ませ、科学的で客観的な文章が書けるよう導く前段とする。例年そうであるが、「日本語・論文技術（基礎）Ⅰ・Ⅱ」で修得したことが充分定着していない点も多々みられる。学生の弱点を洗い出し、その克服に向けて重点的に対処することも必要と考える。そのために、毎時テーマを決めて書かせ、各自の自律学習を促す。	
			アカデミック日本語Ⅰ	アカデミックな文章力と構成力を身につけ、論理的な発表ができるようにする。特に、パワーポイントを活用し、「説明のためのスピーチ」「意見表明のスピーチ」「提言のスピーチ」などのスピーチ力やレジュメ作りを重点的に行う。適宜、資料を配布し、先行研究や先輩の研究に学びながら、自らのテーマを自らが説明し提言していく方向を模索させる。発表後の討議にも一定の時間を割り、他からの意見から学び取る姿勢、国が異なる学生の価値観等にも触れることができるよう授業を組み立てる。	
			アカデミック日本語Ⅱ	アカデミックな文章力と構成力を身につけ、一定の分量の論文・レポートが正確に書けるようにする。そのために、テーマ設定をどのようにするか、また、文体や文構成のために何が必要か、多種の資料を読み合わせタスクも併用しながら、深めていく。また、一人ひとりが実際に論文を書く前に、レジュメ（目次）と「序文・はじめに」を作成しクラス内で討議させる。過不足を相互に補い合うことによって、説得力のある論文が組み立てられることを目指す。	
			ビジネス日本語Ⅰ	異文化下で生きる能力を主体的に確立させるための支援、具体的には就職などのキャリア支援の科目である。待遇表現やビジネス場面での適切な表現を実践的に学ぶ。地域や社会の構成員として日本人との相互作用を経ながら、自由で的確な表現力を身につけ、自己実現を図っていく。その基盤となるよう多様なシチュエーションを準備しコミュニケーション力の伸長を図りたい。DVDや実際のテレビ番組からの教材も活用する。「ビジネス日本語Ⅰ」では、敬語やそれを用いる時に役立つ「クッション言葉」なども取り入れる。	
			ビジネス日本語Ⅱ	日本という異文化下で生きる能力を主体的に確立させるための支援、具体的には就職などのキャリア支援を授業の重点ポイントとする。そのため、待遇表現やビジネス場面での適切な表現を実践的に学ぶ。具体的には、電話のかけ方や訪問、依頼、断り、アドバイス、アポの変更などの各場面でロールプレイをやってみる。さらには、DVDを見たり、就職活動をしている上級生の話を聞いたり、あるいは、企業訪問用のメール作成の作業などを通し、日本社会で協働できる力を身につけさせる。	
	外国語理解		世界の言語Ⅰ	第1外国語および第2外国語として位置づけられている言語以外の言語（ポルトガル語、ロシア語）に関して学ぶ機会を確保するために設定された科目である。専門研究の面から特異な言語の知識が必要となることもあるだけでなく、言語的および文化的な面から知的興味としても多くの言語を学ぶことはきわめて有意義である。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	
			世界の言語Ⅱ	第1外国語および第2外国語として位置づけられている言語以外の言語（ポルトガル語、ロシア語）に関して学ぶ機会を確保するために設定された科目である。専門研究の面から特異な言語の知識が必要となることもあるだけでなく、言語的および文化的な面から知的興味としても多くの言語を学ぶことはきわめて有意義である。「世界の言語Ⅰ」を基礎として展開する。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	
			ラテン語Ⅰ	現在ラテン語はいかなる国においても母語として用いられてはいないものの、欧米の諸言語の中にはその痕跡が色濃く残されており、ラテン語の知識はこうした現代語の仕組みを知る上で、大いに役立つ。本講義では、ラテン語の文字や基本文法およびその文化的背景などについて学ぶ。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	外国理解	ラテン語Ⅱ	現在ラテン語はいかなる国においても母語として用いられてはいないものの、欧米の諸言語の中にはその痕跡が色濃く残され、ラテン語の知識はこうした現代語の仕組みを知る上で、大いに役立つ。本講義では、「ラテン語Ⅰ」を基礎として、文字や基本文法およびその文化的背景などについて展開する。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	
			ギリシャ語Ⅰ	西洋文化を理解するうえで、古代ギリシャおよび古代ローマについて学ぶことはきわめて重要である。そして、それらの古典言語の知識はそれぞれの文化を理解するためには不可欠である。本講義では、ギリシャ語の文字や基本文法およびその文化的背景、新約聖書をギリシャ語原文で読む。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	
			ギリシャ語Ⅱ	西洋文化を理解するうえで、古代ギリシャおよび古代ローマについて学ぶことはきわめて重要である。そして、それらの古典言語の知識はそれぞれの文化を理解するためには不可欠である。本講義では、「ギリシャ語Ⅰ」を基礎として、新約聖書の講読、文化的背景などについて展開する。授業では、文法事項の解説もするが、練習問題を解くことや、様々なアクティビティを行うことによってさらに理解を深め、言語の習得をはかる。	
			海外セミナーⅠ	本学は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏において、海外短期語学セミナーを主催している。セミナーにおいては単に語学研修を行うだけでなく、学生が各国の歴史や文化に触れ、国際的な視野と教養を高める絶好の機会である。そのセミナーに出席し、その事前の授業およびその報告をもって学修成果を認定する本科目は、Ⅰ～Ⅳまで設定されている。上記英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏のセミナー参加による単位認定を行う。	
			海外セミナーⅡ	本学は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏において、海外短期語学セミナーを主催している。セミナーにおいては単に語学研修を行うだけでなく、学生が各国の歴史や文化に触れ、国際的な視野と教養を高める絶好の機会である。そのセミナーに出席し、その事前の授業およびその報告をもって学修成果を認定する本科目は、Ⅰ～Ⅳまで設定されている。上記英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏のセミナー参加による単位認定を行う。	
			海外セミナーⅢ	本学は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏において、海外短期語学セミナーを主催している。セミナーにおいては単に語学研修を行うだけでなく、学生が各国の歴史や文化に触れ、国際的な視野と教養を高める絶好の機会である。そのセミナーに出席し、その事前の授業およびその報告をもって学修成果を認定する本科目は、Ⅰ～Ⅳまで設定されている。上記英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏のセミナー参加による単位認定を行う。	
			海外セミナーⅣ	本学は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏において、海外短期語学セミナーを主催している。セミナーにおいては単に語学研修を行うだけでなく、学生が各国の歴史や文化に触れ、国際的な視野と教養を高める絶好の機会である。そのセミナーに出席し、その事前の授業およびその報告をもって学修成果を認定する本科目は、Ⅰ～Ⅳまで設定されている。上記英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の各語圏のセミナー参加による単位認定を行う。	
			外国理解Ⅰ	英語圏、ドイツ語圏、フランス語圏、中国語圏、韓国語圏、タイ語圏の大学に留学し、修得した単位を認定する。本学の長期留学制度には、本学と海外の大学との学生交換協定に基づく「交換留学制度」と、学位授与権を有する外国の大学の正規の課程に留学を希望する学生が所定の手続きを行い、所属学部教授会で許可を得て留学する「認定留学制度」がある。この制度に基づき、留学先大学で修得した単位を、本学規程に則り、Ⅰ～Ⅳまで設定した科目として認定を行う。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	外国語分野	外国理解	外国理解Ⅱ	英語圏、ドイツ語圏、フランス語圏、中国語圏、韓国語圏、タイ語圏の大学に留学し、修得した単位を認定する。本学の長期留学制度には、本学と海外の大学との学生交換協定に基づく「交換留学制度」と、学位授与権を有する外国の大学の正規の課程に留学を希望する学生が所定の手続きを行い、所属学部で許可を得て留学する「認定留学制度」がある。この制度に基づき、留学先大学で修得した単位を、本学規程に則り、Ⅰ～Ⅳまで設定した科目として認定を行う。	
			外国理解Ⅲ	英語圏、ドイツ語圏、フランス語圏、中国語圏、韓国語圏、タイ語圏の大学に留学し、修得した単位を認定する。本学の長期留学制度には、本学と海外の大学との学生交換協定に基づく「交換留学制度」と、学位授与権を有する外国の大学の正規の課程に留学を希望する学生が所定の手続きを行い、所属学部で許可を得て留学する「認定留学制度」がある。この制度に基づき、留学先大学で修得した単位を、本学規程に則り、Ⅰ～Ⅳまで設定した科目として認定を行う。	
			外国理解Ⅳ	英語圏、ドイツ語圏、フランス語圏、中国語圏、韓国語圏、タイ語圏の大学に留学し、修得した単位を認定する。本学の長期留学制度には、本学と海外の大学との学生交換協定に基づく「交換留学制度」と、学位授与権を有する外国の大学の正規の課程に留学を希望する学生が所定の手続きを行い、所属学部で許可を得て留学する「認定留学制度」がある。この制度に基づき、留学先大学で修得した単位を、本学規程に則り、Ⅰ～Ⅳまで設定した科目として認定を行う。	
	数理・情報分野		教養数学	高校時代までに学ぶ数学が多彩な内容であることから、数的事項の「理解」ではなく「記憶」に頼る学習になっている学生も多い。結果的に社会人基礎力として必要と思われる数学的能力が不足し、企業側はその素養を試すSPI検査などを課すようになってきている。この講義では、そうした素養を一定の時間をかけて多くの問題を解くことにより、数学に対する苦手意識を払拭し、論理的に考える能力を高め、社会人として必要な数学力養成を目指す。	
			数理科学	「基礎数学への招待」と「カオスと暗号」との2つのテーマを掲げて学習する。前者は、高校の数学を復習した上で、指数・対数、三角関数と微分・積分の初歩的な部分を学習する。後者は、最初に社会現象や自然現象を記述し解明する観点に立ちカオスを扱い、その後で、社会のセキュリティの基礎となる暗号を扱い、暗号技術及びその背景にある数学、また暗号が応用されている身近な分野について解説し、基礎となる数学的手法の理解を目指す。	
			確率入門	確率は天気予報のような日常生活にも登場する数学的概念であり、文系、理系を問わず基礎知識としてその重要性は高い。この講義では、まず、代表的な確率的問題を紹介し、確率についての思い違いや確率の意外な結果などをみる。次に、順列と組み合わせに関する学習を基に、具体例を示しながら確率の定義と基本的な性質について解説する。さらに、確率変数と確率分布および大数の法則について解説する。また、時間が許せば保険金融数学とのつながりをも考察したい。	
			統計入門	コンピュータ、インターネットの発達により、社会的現象に関する様々な情報を収集、分析することは以前に比べ格段に容易になっている。どのような仕事に就いても、データやグラフを読み取り、分析する能力、新聞、ニュースで報じられる統計やグラフの意味の理解力、自分の考えを理解してもらうために統計による客観的情報を示しての発表、説得する能力が必須である。統計データとは何かという根本的問題から始め、データ加工、分析の方法について解説する。	
			情報倫理	「情報倫理 (Nethics)」は、ネットワーク (Network) を介して情報を扱う上で必要とされる倫理 (Ethics) のことを指している。この講義では、私たちが住むネットワーク社会において、高度情報化社会における一人として、我々が守るべきルール、モラルおよび技術について、学ぶ。また、ネットワーク社会における危険とその回避方法についても学ぶ。ネットワーク社会を生きるために必要な倫理、及びその基礎理論・知識を獲得し実践できることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	数理・情報分野	マルチメディア表現	デジタルメディアを活用した表現技法を学ぶ。授業では、指定したテーマにしたがって、情報を画像や動画、音声などのメディアを通して効果的に表現し、そのメッセージを伝達する手法を身につける。特に、身近なデジタル機器である携帯電話やデジタルカメラ、デジタルビデオ等を取り上げ、その特性を生かした活用方法を考える。情報を表現し、伝達するメディアとして、Web ページを作成し、情報化社会におけるマルチメディア表現技法を修得する。	
		ネットワーク演習	パーソナルコンピュータなどの情報メディア機器と情報ネットワーク技術を理解し、その特性をいかした利用を図る。インターネット接続などの基本設定のほか、電子メールなどのネットワークアプリケーションの仕組みを学ぶとともに、実際の接続や利用に関わるトラブル対策により、情報メディア機器を考え、表現する自らの道具として使いこなせる技術の修得を目指す。あわせて、著作権などの法律知識とともに、情報社会におけるモラルと具体的なセキュリティ対策を身につける。	
		社会データ分析入門	パソコンを利用した国勢調査データの処理手法を学習する。まず、インターネットから国勢調査データの入手方法を紹介する。次に国勢調査データを処理しながら、Excel の基本操作、統計処理とグラフ作成の基本技法を学ぶ。最後は、グループごとに三遠南信地域における市区町村の国勢調査データを分析し、地域の人口、経済、産業、文化、社会などを含めた特徴や問題点をまとめ、プレゼンテーションを行う。地域研究に活かせるデータの収集・分析能力を身に付ける。	
		プログラミング	コンピュータを利用するための応用技能であるプログラミングを取得する演習である。前半は、プログラムを理解するために、プログラム構文を学習し、簡単なアプリケーションを事例にしてプログラムでどのようにコンピュータを動作させることができるかを体験する。後半では、機能を連携させ簡単なアプリケーションを作成し、プログラムの外観を理解するとともに、論理的にアプリケーション作成を体験する。プログラミングの基本的な流れを身につけることで、他のプログラミング言語の習得にも応用できる素養を磨く。	
		情報の科学	文字・画像・音声・動画など、情報そのものの形式を学習する。現代の情報はデジタルデータとして表現されることが多く、データを扱うための道具であるコンピュータのしくみについて電気・半導体・論理演算などから理解を深め、情報の物理的形式からデジタル形式への変換方法を学ぶ。文字データについては、アンケート調査の自由記述の分析を通して、正規表現によるパターン一致・キーワードの抽出・文献間の差異の数量化など、形式だけでなく、その操作も学習する。	
		情報と社会	主にインターネットを素材とし、社会の三つの側面から情報との関係を学ぶ。第一に経済的側面、具体的にはネット広告の手法と収益構造、評判システムの役割などを学ぶ。第二に法的側面、即ち知的所有権、個人情報保護、ネット犯罪などをとりあげる。第三に人的側面、つまり人間関係の密度・中心性・中心性形成理論などを学ぶ。講義を通し、情報を作りだしている社会を利益と規制の両面から把握し、社会を構成する人間の組織を科学的に理解し、情報を受信・発信する際に主体的に判断できる能力を養うことを目標とする。	
		情報総合演習	コンピュータによるデータ処理と情報表現の手法を学び、スキルの向上を目指す。単にコンピュータの操作方法を修得するだけではなく、コンピュータによるデータ収集、データ処理、データ表現に関する知識と技能を向上させる。ワードによる文書作成方法、エクセルを用いた統計データの処理方法、さらにエクセルの図表やプレゼンテーションツールを用いた情報の表現手法を身につける。学習や研究の道具としてコンピュータを有効かつ総合的に活用できるようになることを目標とする。	
	自然分野	物質の科学	「化学物質と毒性」と「究極の物質とは何か」をテーマに学習する。前者のテーマのクラスでは、問題となる化学物質による環境汚染や健康危害の現状を紹介すると共に、それらの原因と推測されている化学物質の性質、開発の目的、毒性評価等について解説する。後者のテーマのクラスでは、物質についての現在の自然科学での理解とそれに至った自然現象・考え方について解説する。究極の物質とは何か、どういう現象・実験や考え方から現代の物質観が形成されたかを考えてみる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	自然分野	地球の科学	われわれ人類と生物の住処である地球は、太陽系の中でも特異な惑星である。この星には、液体の水をたたえた海があり、生命を宿している。46 億年という悠久の歴史の中で、さまざまな偶然と必然とが絡み合っ て、現在の地球ができあがった。宇宙と地球の関係、地球の構成、起源 や進化について学び、躍動する地球の姿を知る。そして、その絶妙なバ ランスの上に立った地球システムの理解を通して、現在の地球環境問 題の本質に迫る。資料を参照しながら、高度な数学や科学の知識が無く ても理解できるように解説する。	
		宇宙の科学	夜空を見上げているだけでは想像もつかない宇宙での様々な現象の存 在やその物理・化学機構が、宇宙の観測とこれまで確立した自然科学の 諸法則を駆使して、次々と明らかになってきている。宇宙の科学を題材 に、現代の宇宙像を学ぶと共に自然科学のアプローチ・考え方を学ぶ。 50 億年後の太陽はどうなっているか、地球の将来は、ブラックホール とは何か、暗黒物質とは何か、宇宙の始まり・ビッグバン・宇宙の進化 とは、等宇宙科学全般を広く紹介する。	
		生命の科学	生きていることの科学をテーマとする。20 世紀半ば以降大きな進歩を 遂げた遺伝子研究分野では、特に DNA 組換え技術や細胞操作技術の発 展により、生命現象をミクロな分子レベルで解明することが可能とな った。さらに、21 世紀我々が直面するであろう様々な問題、たとえば 環境、エネルギー、食糧、医療等に解答を見出す可能性を秘めている。 本講義では、生命活動の科学的基礎知識の学習に基づき、安全で健康な 生活とは何かを、科学的論理的に分析・思考ができる科学的素養の習得 を目標とする。	
		環境の科学	環境は地球誕生以来、生命を、生物を、そして、人類を育んできた。そ れらの混然一体とした共同体は、地球上で様々な特徴をもつ生態系を 形成し、人類とともにあってから後は、互いに作用を及ぼしつつ歴史と 文化を創り上げてきた。ここでは、多様な生態系を特徴づけている環境 構成要素とそれぞれの関わり、さらに、人類の働きかけと人類への影響 について、地域および地球スケールで物質循環に焦点を当てつつ、私た ちの社会の持続的発展に向けての環境との付き合い方を探求する。	
		科学技術史	現代の科学技術文明は、人類の歴史の中で、数限りない発見や発明の結 果としてつくりあげられてきた。人類は旧石器時代より、自然を利用す る中で、経験によりそれを理解した。さらに、それを理論化・体系化す ることによって自然科学が生まれた。現代の科学技術は、17 世紀に成 立した近代科学の発展・拡大したものである。古代から現代にいたるま で、自然がどのように理解されかつ利用されてきたかについて解説す る。自然科学や数学の知識は前提としないが、世界史、哲学や宗教につ いての初歩的な理解が必要である。	
		現代技術と社会	テーマは「現代技術の利点と弊害」である。我々の生活の中には多くの 技術が利用されている。もし車が無かったら、もしテレビや冷蔵庫が無 かったら、我々の生活はどのように変化するであろうか。困ることは 何か。良くなることは何か。現代技術が我々にもたらす利点と弊害につ いて考えてみる。日常生活における幾つかの技術を取り上げ、技術の原 理、技術を必要とした背景、技術の社会への影響について考えてみる。 また、水力・火力・原子力・太陽エネルギーなどのエネルギー技術に関 して解説する。	
		地球環境問題	地球環境問題が人類にとって最大の課題であることは言うを俟たな い。悠久の地球史の中で培われた地球環境が、人類の出現とその活動に よっていかに変質され破壊されてきたかを概観し、直面する環境問題 について、その実態と原因について解説する。これらを地球システムの 観点から見ると、どのようなことがいかに関連して生じているのか、科 学的にとらえる視点が得られるようにする。さらに、人類と自然との共 存はいかにして可能か、新しい社会システムのあり方と環境保全への 道を模索する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	自然分野	自然環境と地理	古来、人間は、自然環境と深く関わりながら生産活動を行ってきた。しかしながら、生活の豊かさ・便利さを求めて、人間は自然環境を改変してきた結果、地球環境や地域環境に不都合が生じてきた。そこで、自然環境の仕組みとその地域的差異について自然地理学から考察した後、具体的環境問題である「水問題」を論ずる。水を対象に選んだ理由は、水が自然環境のあらゆる要素に関わっており、自然環境を理解する上で最も重要な存在だからである。自然と人間活動との関係性について、水文環境や森林環境を中心に日常生活の様々な事例を取り上げながら学び、地球環境問題の解決策について考える。	
		動物行動学	動物行動学は Ethology の和訳であり、ヒトを含む動物の行動を研究する学問である。この和訳からは、動物の面白い行動が博物学的に扱われる簡単な学問が連想されるかもしれない。実際には、動物行動学は、全く異なる動物種による様々な行動の背景にある「適応」と「進化」、言い換えれば、それぞれの動物個体の遺伝子が効率よく残るように働く一貫した原理を中心に展開される体系的な学問である。本講義では、具体的な動物行動の事例を取り上げつつ、動物行動学的な考え方と現代の人間社会との関連についても考える。	
		健康科学	健康を理解することは、人間の生命や生活を理解することに通じる。身近な健康問題をわかりやすく説明するとともに、健康管理のあり方を解説する。学生自身の生命・生活を健康という観点から見直すチャンスとすることを第一のねらいとしている。健康観の歴史的変遷と現代的健康の定義（人間にとって生と死、生涯とは何か）、日本人の傷病構造（生活習慣病の基礎知識）を学ぶとともに、健康的な食行動（栄養の基礎、望ましいダイエットのすすめ方）、スポーツ行動、休養行動、嗜好品の愛好行動（喫煙・飲酒行動のメカニズム）等を理解する。	
		スポーツ工学	スポーツを含む身体運動だけでなく、用具・施設等の特性や人間とのマッチング、環境がスポーツ活動に与える影響等を、機械力学や振動理論、制御理論、流体力学、材料力学等、従来工学の分野で用いられていた研究手法をスポーツに適用した研究分野がスポーツ工学である。理論を理解するために必要な力学や数学を説明するとともに、人間の特性を踏まえた用具開発や安全性の検討、実験・測定とシミュレーションによる新しいスポーツ技術の可能性、工学分野からみた人の動きの効率性などを実際のスポーツ場面に当てはめながら解説する。	
		トレーニング科学	基本的な身体の構造を学びながら、トレーニングの原理や一般原則ならびにスポーツパフォーマンスを高めることを狙いとした各種トレーニングの方法論を概説する。また、健康増進を目的としたトレーニングの方法論を概説する。さらに、トレーニング効果を高める多角的アプローチ法として、メンタルトレーニングやスポーツ栄養についても触れる。そして、トレーニングの対象となるヒトに関する生物学的基礎を学びながら、様々なトレーニングに関する目的・方法・特殊性及びトレーニング効果などについて理解を深める。	
	社会分野	歴史学	最初に、歴史学の意義や史料論・時代区分論、歴史観について学習する。その上で、地域別・時代別に展開することになる。具体的には、日本の原始時代・近世・近現代や、大航海時代・ヨーロッパ植民地時代の東南アジアなどについて、諸史料を基に、それぞれのテーマを設定して、各地域・各時代の社会の在り様を検討する。これらの検討を通じて歴史・文化の多様性を認識し、そのことを受容できる人間性を構築することがねらいである。	
		考古学	大地に遺る過去の人間活動の痕跡から、当時の人々の生活の在り様を考察する。具体的には、東西日本の交流点として特有の地域的特色をもつ東海地方の旧石器から縄文・弥生・古墳・古代にかけての遺品や発掘調査によって明らかになりつつある古代中国文明について学習する。考古学の発展は近年著しいので、新しい考古学の成果を紹介し、そのことを通じて正しく現状を捉えることができるようになることを目標とする。考古学の取り扱う豊かな物質的資料に基づいて、文明とは何かを考えて行きたい。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	社会分野	地理学	自然と人間の関係を総合的に考察することを目的とする。特に、地域間格差や民族対立、地球環境問題が深刻化している現代社会において、人口・農業・災害など様々な地理的事象の特徴とその諸問題を多様な側面から取り上げ、現代社会の諸問題を地理的側面から把握するとともに、地理学の基礎的な理論を理解する。「地理統計要覧」や地図帳などビジュアル的資料を積極的に利用しながら、それぞれのテーマに触れながら環境科学としての地理学の立場で展開する。	
		社会学	社会学は、人と人の関わりについて総合的にとらえ、社会現象に関するメカニズムを実証的に考える学問である。その研究対象や研究領域が多岐にわたるだけでなく、歴史・文化・経済などの諸条件への理解も必要である。授業では、産業化・近代化の進展が西洋や日本の社会システムに与えた影響を産業・経営・職業に焦点をあてて考えることや、現代日本社会の課題となっている、家族関係・未婚と晩婚化・少子化・コミュニケーションとインターネットなど、現代社会に関わる多様な話題を取りあげる。	
		政治学	政治は私たち個人の仕事や暮らしから地域や国家の重大事に至るまで、そのあり様に大きな影響をもたらしている。しかし、いざ「政治とは何か」と問われるとその働きや意思決定の主体や過程は曖昧模糊とし、実態が捉え難い。議会、政党、政権、内閣、首長、大臣、官僚などを要素とする政治システムが、国民の現状や意思をどのように捉え、また、造り出しているのか。そうした政治メカニズムについて、現代の地方、国家はもちろん国家間の政治情勢にも目配りしながら具体例をもとに学び、政治を理解する目を養う。	
		経済学	GDP、物価、失業、為替レート、景気、経済成長、デフレ、国債残高、貿易黒字、株価、投機、環境等々、毎日のニュースには経済用語が飛び交っている。そのときどきの経済状況は、私たちの暮らし、とくに所得、貯蓄、消費、就業等、とも直接関係してくることも多い。しかし経済学は、独特の用語や説明のため、ややもすると面倒くさいイメージがある。本講義では、経済学を専門としない学生にとっても不可欠といえる、経済学の基本知識や経済問題について考え方をわかりやすく説明する。	
		法学	憲法を機軸とした法の体系と内容を概観するとともに具体例を紹介しながら立法と司法の手続きを学び、社会人として必要な法の基礎知識およびその知識を活用するための法的なものの考え方を修得する。さらにそれらを視野に入れながら人間社会のなかで法とはどのような働きをもつのか、また、法は社会と個人とっていかにあるべきかを考察し、法とは単に「決めごと、ルール」だけを意味するのではなく社会や国家の歴史や文化の体现でもあることを理解する。	
		経営学	経営学は、企業を典型とする組織体の構造および行動の原理を明らかにする学問である。経営学入門として、対象としての企業と経営の概念を把握するとともに、株式会社制度や組織、生産システム、人事労務管理、財務管理などについて学ぶ。また、それを基礎として日本における経営や管理の発展とその特質、社会的責任や公正取引といった観点から企業の新たな動きなどについても学習する。経営学に興味をもち、現代において経営学の果たす役割について理解することを目的とする。	
		憲法学	憲法は、国家の基本法である。そこには国の基本的なあり方やしくみが定められている。したがって、憲法について理解することは、主権者である国民にとってぜひとも必要なことである。たとえばプライバシー権、信教や表現の自由、教育権、生存権、死刑制度、平和主義などである。しかし、憲法を学ぶということは、たんに憲法に書かれていることを覚えることではない。現実には生じているさまざまな出来事を憲法に基づいて考えることができるようになることが憲法を学ぶ真の目的である。	
		レクリエーション論	社会生活の豊かさのひとつの指標となりつつある余暇とレクリエーションの意義や、レジャーとの関係を明らかにするとともに、レクリエーション活動の現状について理解を深め、今後の日常生活にレクリエーション活動を活用することができる能力や態度を育てる。また、自然環境活用型レクリエーション、農山村環境活用型レクリエーション、都市自然活用型レクリエーション、公園におけるレクリエーションの基礎と実態を学ぶ。レクリエーションの果たす役割を十分に理解するとともに実践に役立つ能力を養う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	人文分野	ジェンダー論	当たり前で自然なものとなってきた性や様々な性現象を、ジェンダー・センシティブな視点から考察し、ジェンダー理解を深める。まず女と男を二分する性通念を批判的に考察しながら、性の多様性などセクシュアリティ問題を把握する。次に「女らしさ」あるいは「男らしさ」という社会規範に潜む「性別に関する差別と権力」を考察する。ジェンダーとは「社会的・文化的に構築された性差」という一面的な定義だけでなく「すべての人が差別されず、平等に、自分らしく生きることをめざす」概念として理解することをめざす。	
		哲学	哲学とはどのような学問なのかについて、その基本的な理解を目標とする。哲学の初学者を対象に、この学問の実際を紹介していく。西洋の代表的な思想と東洋の代表的な思想を、分かりやすく講義する。いくつかの哲学的問題を取りあげ、受講者と共に検討していく中で、哲学という学問が何を、何のために考察するものであるのか、明らかにしていく。この過程で、必要に応じて哲学史の知識も講義していきたい。人文分野における哲学の思考法について一定の理解を得ることが目標となる。	
		論理学	「論理的に正しい」とはどういうことかについて、代表的ないくつかの論理学を実際に修得しながら学んでいく。論理学はすべての学問の基礎であり、どの学問を学ぶにしろ必要不可欠なものである。また、それぞれ異なった視点から、世界のあり方や人間の生き方を考えるものでもある。論理学が世界観と人生観の表現であることを、丁寧に分かりやすく説明したい。具体的には、命題論理・述語論理・名辞論理という代表的な論理学について学習する。	
		宗教学	宗教学は、宗教という文化現象を、構造や機能、歴史などをとおして総合的かつ科学的に考える学問である。宗教の範囲は多岐にわたり幅広く、私たちの日常生活の中にもさまざまな形で浸透している。内容としては、「天地創造」「ブッダ」「最後の誘惑」といった宗教を題材とした映画作品をもとに、そこに登場する歴史的装置、セリフなどのファクターを抽出しながら西洋におけるキリスト教などについて考える。また現代の日本や中国南部・西部の少数民族の信仰の造形をとおして、東洋の諸民族の宗教観念や習俗を考える。	
		心理学	心理学は、人間の心のさまざまな働きと、それにもとづく行動を科学的に研究する学問である。現在の多岐にわたる研究分野や研究領域について、VTRや小デモンストレーション実験、受講生の主体的な参加をうながすグループワークなどを通じて受講生の知見をより深めたい。内容としては、「現代心理学とは何か」にはじまり、脳、言語の発達、感覚と知覚、学習、記憶と忘却、判断と意思決定、などについて考える。結果として、対人関係のあり方にも役立つように配慮する。	
		文化人類学	文化人類学とは、フィールドワークを通じてそれぞれの民族の社会や文化を総合的にとらえて民俗誌としてまとめるとともに、民族誌に描かれたそれぞれの社会や文化の比較をとおして民族性や人間とはなにかをあきらかにする学問といえる。内容としては、文化人類学と民俗学の同差、未開と文明の比較文明論、狩猟採集・牧畜・農耕・都市などの生活様式とその住まい、海山で生きていくための生活技術、婚姻や葬制といった通過儀礼を学習する。	
		現代の思想	現代社会が直面している多くの問題は、哲学的、倫理的な考察を必要としている。たとえば、コンピューターにも心があるか、脳死は人の死か、動物にも権利があるか、クローンはいかに非か、技術とは何かなどがそれである。こうした現代におこっている様々な課題について哲学的に考察するとどうなるのかを、いろいろな哲学的考察議論を紹介しながら学び、こうした問題に対する理解を深めることを目指す。現代の問題について考えるための基本的知識についても学ぶ。	
		民俗学	民俗学は、日本に伝承されてきた、生きていくための生活文化を対象とする。日本の恵まれた海山里の環境のなかで、それぞれの地域の人々がうみだした優れた知恵を学びながら、日本の生活文化の特色や地域性についてあきらかにし、さらには今日的な課題についても考えたい。内容としては、海山里に根ざした地産地消の食文化、隣人ともいえる動物たちと人のつきあいのあり方と変遷、稲を中心とした日本における靈魂観や年中行事、人の一生にともなう儀礼や祭りの意味などを学習する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	人文分野	スポーツ文化論	生活の一部となりつつあるスポーツが文化現象であることを学んでみる。社会・文化現象としてのスポーツ、スポーツの核的要素とその変質、現代スポーツの特質について説明する。また、スポーツの役割と課題について、オリンピックの歴史を概観する中で整理してみる。さらに、現代スポーツが抱える文化的課題について、生涯スポーツ、メディア・スポーツ、教育としてのスポーツ（体育や大学スポーツ）、スポーツ・ジェンダーと今後の課題、プロスポーツの現状と課題（Jリーグとプロ野球の比較）、日本文化としての相撲などを題材に分析してみる。	
		日本事情Ⅰ	母国を離れ生活基盤を置くことになった日本社会を理解してもらうために、外国人留学生に特化した科目として配置し、文化と歴史を重点的にとりあげる。すでに日本滞在歴1～2年を経過した者にあつては、生活面でそれぞれが様々な異文化を体験してきている。また、新たに日本社会に加わったばかりの者もいる。日本の生活、文化や歴史を学習することによって、外国人留学生がいろいろな局面で感得する（した）であろう違和感、疑問、価値観の相違などを、体系的に整理・分析しなおすきっかけとなるものとする。	
		日本事情Ⅱ	「日本事情Ⅰ」に引き続き、日本人との接触面で外国人留学生が体験する（した）数々の軋轢を冷静客観的に判断するために、その背景となっている日本の社会、政治、経済、産業構造のしくみなどを学習する、留学生特化の科目である。カルチャーショックや日本嫌いの意識を克服するきっかけとなるよう日本理解を深め、一人ひとりがスムーズな留学生活が送れるよう支援する。また、日本人との交流、協働によって、将来日本企業で働ける人材、あるいは、出身国との架け橋となる人材を育成していくこともねらいとする。	
		文学	古代から現代に至る日本およびヨーロッパの代表的な文学作品に触れ、解説を交えながら読んだり映画を鑑賞する。日本では『古事記』『万葉集』『奥の細道』、三島由紀夫の作品、西脇順三郎の作品などを取り上げる。また、ヨーロッパでは、古典的なホメロスの作品やギリシャ神話はもちろん、『ベーオウルフ』『カンタベリー物語』シェイクスピアの作品などイギリスのもの、フランスの『赤と黒』『失われたときを求めて』とモリエールの作品などを取り上げる。これらの作品を通じて、時代背景や社会制度などについて学ぶだけでなく、人間の生き方や人間そのものについて深く考える。	
		日本語学	従来の国語教育の枠組みではなく、新しい角度から、世界の諸言語の一つとしての日本語について学ぶ。音韻、表記、語彙と意味、敬意表現を含む言語活動の基礎知識を概括的に獲得し、あわせて、日本語を科学的客観的に分析する能力を養うことを目的とする。この科目を受講することによって、日本語についての新しい世界が拓けると同時に、異文化の隣人との円滑なコミュニケーションの足がかりとすることもできよう。専門的な日本語研究の方法についても論じる。	
		古典の世界	文学で学んだ基礎知識をもとに、古代から近代に至る日本や西洋の代表的な文学作品を読み、より深く古典文学の世界に触れることを目的としている。内容としては、平安時代の『今昔物語集』を読んで説話の面白さ、不思議、滑稽、悲しさなど平安人の心の底を探ったり、近世の『浮世草子』にえがかれた経済事件をとりあげ、現代と比較しながら金銭に翻弄される人間の心を探ったり、『デメロン』の「鷹の話」をとおして短編小説の味わいにふれる。	
		言語と文化	言語と文化がいかにかわるかを具体的に考察し、欧米や中国における言語文化の特徴を知ることによって、日本と日本文化と日本語について考える。大きな3つのテーマとして、ヨーロッパ文化の特徴を表す「多様と統一」ないし「分化と統合」という言葉を導きの糸にしたヨーロッパの言語文化の考察、中国を中心とした漢字及び漢字によって築かれた文化に関する考察、日本語と英語を対照し、その相違点を文化との関わりにおいて論じ、これまで日本人のなかに潜んでいた日本語蔑視の思想に関する考察を行う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	人文分野	芸術論	芸術は、美をうみだすための創造的な活動の総称である。美術・グラフィックデザイン・タイプフェイスデザイン・建築等の芸術家の実践を通して、芸術における自然や自由の意味を考える。また、芸術家の書家・彫刻家・画家、民芸運動家を取り上げ、インスタレーションと保存、見ることと知ること、自然の法則とシステム、美術とデザイン、民族の歴史と美意識、東洋と西洋の空間意識などについて考える。芸術だけでなく、現代社会のさまざまな事象に対する自らの見方を確立する力を養う。	
	総合	総合科目	共通教育科目として開講している各分野科目から得た知識を基礎に、物事を総合的にとらえ考察する能力を養う。 共通教育科目として開講している各分野科目から得た知識を基盤に、物事を総合的にとらえ考察する能力を養う。本科目においては、いくつかのテーマに関する内容の理解とともに、大学生として身につけて欲しい柔軟な理解力、自分の考え・意見をまとめられる能力、意見等を適切に文章化できる能力、聞き手に分かりやすい発表を行える能力、議論・討論を充分に行える能力、文献を調べ、その内容をまとめられる能力等を培うことを目標としている。授業は、eラーニングによる自主学習も交えながら進める。	
		総合演習	大学生として修得すべき能力に、新しい知識を吸収できる柔軟な理解力、自分の考え・意見をまとめられる能力、意見等を適切に文章化できる能力、聞き手に分かりやすい発表を行える能力、議論・討論を充分に行える能力、文献を調べ、その内容をまとめられる能力等がある。個々のテーマに関する内容の理解とともに、上記の中の幾つかの能力を培うことを目標としている。予定しているテーマは、日本語の文章表現の実践に関するもの、テキストの輪読、討論を通して環境問題の科学的検討を行うもの、自然科学の理解を実感できるようなものなどである。	
		キャリアデザイン基礎	将来における「キャリア」という視点から、キャリアプランニングの基礎的考え方や理論などについて学び、適切な社会理解と職業観・勤労観を涵養するとともに、学生時代の学びの目的を明確にさせ、学業に対する前向きな姿勢を醸成する。また、グループワークなどを通じて、学生自身の自己理解力を高め、主体的な取組み姿勢と意欲を向上させ、自らのキャリアプランについて考え、行動する力を養う。これらの学びを通して、学生はより具体的なキャリアプランの描写と実践することができ、その具現化を高める。	
		キャリアデザイン応用	卒業後のキャリアプランを描写・実践するため、他者の知見や経験等を学ぶとともに、現代の日本社会における「キャリア」や「労働」、「就職」が持つ意味を多面的領域から理解することによって、「キャリア」に対する客観的理解と主体的な取組み姿勢を促す。 (オムニバス方式／全15回) (154 森川竜哉／13回) 現代日本社会とキャリアという視点から、その現状や課題、今後の方向性などについて考える。 (154 森川竜哉・134 藤原淳子／1回：共同) 「女性」と「仕事」について考える。 (154 森川竜哉・117 中野菜保子／1回：共同) 「好きなこと」と「仕事」について考える。	オムニバス方式・共同（一部）
		キャリアデザイン特殊講義	企業や地域社会との産官学連携教育や特定分野のキャリア形成に資する講義を展開することによって、進路等に明確な目標と方向性を持っている学生や特定分野に興味・関心のある学生の学習意欲と主体的なキャリア形成姿勢を高めることが講義目標である。これらの学びを通して、学生はより具体的なキャリアプランの描写と実践することができ、その具現化を高める。地域公共人材という考え方を理解でき、地域公共人材像の中に自分のキャリアデザインを関連付けることができることが到達目標である。	
	体育分野	スポーツ・健康演習	現代社会においては、運動不足病、生活習慣病の増加と若年化が大きな問題となっている。受講生自身が体力と健康状態、食生活等を確認・評価すると共に身体運動を積極的に実施するための実戦およびトレーニング・コンディショニング等の知識を身につけさせる。授業の運営は、5名の教員が役割分担し、リレーしながら1クラス6班を回りながら、全班・全クラスとも同じ内容で実施する。（複数クラス開講） (オムニバス方式／全15回)	オムニバス方式・共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	体育分野		A・B クラス (146 宮崎幸子・36 湯川治敏・77 岡本浄実・12 元晶煜・70 伊藤寿浩／3回：共同) 複数班合同で、初回ガイダンス 1 回、レクリエーションスポーツ演習 2 回を実施。 (146 宮崎幸子／2 回) 体力および日常の運動状況を客観的に評価するための体力測定を実施。 (36 湯川治敏／2 回) 食生活を評価し、健康障害に関する知識を学び主体的な健康行動の確立を目指す。 (77 岡本浄実／4 回) 屋内球技とウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (12 元晶煜／2 回) 屋外団体スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (70 伊藤寿浩／2 回) 屋外個人スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 C・D クラス (99 杉町明子・129 稗田睦子・138 松尾浩世・70 伊藤寿浩・12 元晶煜／3回：共同) 複数班合同で、初回ガイダンス 1 回、レクリエーションスポーツ演習 2 回を実施。 (99 杉町明子／2 回) 体力および日常の運動状況を客観的に評価するための体力測定を実施。 (129 稗田睦子／2 回) 食生活を評価し、健康障害に関する知識を学び主体的な健康行動の確立を目指す。 (138 松尾浩世／4 回) 屋内球技とウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (70 伊藤寿浩／2 回) 屋外団体スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (12 元晶煜／2 回) 屋外個人スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 E・F クラス (99 杉町明子・156 安田真奈・70 伊藤寿浩・100 鈴木康博・31 新井野洋一／3回：共同) 複数班合同で、初回ガイダンス 1 回、レクリエーションスポーツ演習 2 回を実施。 (99 杉町明子／2 回) 体力および日常の運動状況を客観的に評価するための体力測定を実施。 (156 安田真奈／2 回) 食生活を評価し、健康障害に関する知識を学び主体的な健康行動の確立を目指す。 (70 伊藤寿浩／4 回) 屋内球技とウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (100 鈴木康博／2 回) 屋外団体スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。 (31 新井野洋一／2 回) 屋外個人スポーツとウォーミングアップ・クーリングダウンの意義と方法に関する演習と実技。	演習 12 時間 実技 10.5 時間
		スポーツ実技Ⅰ	種目としてバレーボール、バスケットボール、ダンス、ジョギング・ウォーキング、ソフトボール・野球、テニス、ウェイトトレーニング、ゴルフ、テニスの 10 種目程度を開講する。「スポーツ・健康演習」で獲得した運動実践についての基礎的知識・技能をより発展させ、自ら運動に取り組むことができる積極性を醸成し、生涯スポーツへの導入を行う。継続的な運動を行うために、各種目における運動の特殊性、施設用具についての知識、ルール、マナー、チームスポーツの場合にはチーム内の連携、試合の運営など実践力のみでなく、総合的な企画力・行動力を伴うスポーツ実践者の育成を行う。	
		スポーツ実技Ⅱ	種目としてサッカー、バドミントン、卓球を開講するとともに、コンディショニングの一つとしてスポーツ・マッサージを開講し、単なるスポーツ種目にとどまらずより深く人間の身体について学ぶ機会を提供する。スポーツ種目では「スポーツ実技Ⅰ」と同様に、生涯スポーツとして継続的に実施するための知識と実践能力を身につけるのみでなく、運動の特殊性、施設用具についての知識、ルール、マナー、チームワーク、試合の運営などについても学習し、総合的な企画力・行動力を伴うスポーツ実践者を育成する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	学部共通科目	文学部総合研究	この授業では、新入生に対して文学部の全体像を紹介する。新入生を3つのクラスに分け、文学部のテーマである「人間について探究する」ことについて、人文社会科学 3 コース 8 専攻、心理学科 1 専攻、歴史地理学科 3 専攻及び日本語日本文学科 1 専攻から代表の教員が、それぞれ独自の観点から概説する。新入生が文学部の全体像を理解することによって、2 年次の専攻選択や卒業までの履修計画にも役立てる。 (オムニバス方式／全 15 回) A クラス (18 片岡邦好／2 回) 第 1 回目に 3 クラス合同講演会開催。図書館・記念会館他学内施設見学及び e-learning の紹介。 (17 樫村愛子／2 回) 社会学の紹介とテーマ概説。 (30 永瀬美智子／1 回) 英語圏文化・現代国際英語の紹介とテーマ概説。 (20 河合まゆみ／1 回) ドイツ語圏文化の紹介とテーマ概説。 (49 中尾充良／1 回) フランス語圏文化の紹介とテーマ概説。 (38 和田明美／1 回) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (16 漆谷広樹・32 平高史也／1 回：共同) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (7 長井千秋／1 回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (6 近藤暁夫／1 回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (21 木之下隆夫／2 回) 心理学の紹介とテーマ概説。 (8 伊集院利明／2 回) 現代文化・メディア芸術の紹介とテーマ概説。 B クラス (18 片岡邦好／2 回) 第 1 回目に 3 クラス合同講演会開催。図書館・記念会館他学内施設見学及び e-learning の紹介。 (17 樫村愛子／2 回) 社会学の紹介とテーマ概説。 (30 永瀬美智子／1 回) 英語圏文化・現代国際英語の紹介とテーマ概説。 (20 河合まゆみ／1 回) ドイツ語圏文化の紹介とテーマ概説。 (49 中尾充良／1 回) フランス語圏文化の紹介とテーマ概説。 (38 和田明美／1 回) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (15 空井伸一・32 平高史也／1 回：共同) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (7 長井千秋／1 回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (6 近藤暁夫／1 回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (21 木之下隆夫／2 回) 心理学の紹介とテーマ概説。 (8 伊集院利明／2 回) 現代文化・メディア芸術の紹介とテーマ概説。 C クラス (18 片岡邦好／2 回) 第 1 回目に 3 クラス合同講演会開催。図書館・記念会館他学内施設見学及び e-learning の紹介。 (17 樫村愛子／2 回) 社会学の紹介とテーマ概説。 (30 永瀬美智子／1 回) 英語圏文化・現代国際英語の紹介とテーマ概説。 (20 河合まゆみ／1 回) ドイツ語圏文化の紹介とテーマ概説。 (49 中尾充良／1 回) フランス語圏文化の紹介とテーマ概説。 (38 和田明美・32 平高史也／1 回：共同) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (41 藤井貴志／1 回) 日本語日本文学の紹介とテーマ概説。 (2 小野賢一／1 回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (6 近藤暁夫／1 回) 歴史・地理学の紹介とテーマ概説。 (21 木之下隆夫／2 回) 心理学の紹介とテーマ概説。 (8 伊集院利明／2 回) 現代文化・メディア芸術の紹介とテーマ概説。	オムニバス方式・共同 (一部)
		卒業論文	「卒業論文」は、自分の所属する専門分野について、自分でテーマを決め、資料・実地調査を行い、これに基づいた解釈、先行文献との比較を通して、自分なりの結論を導き出し論文を執筆する。提出された「卒業論文」の内容に基づき、論文審査と口述試験を行う。このことで、テーマ発掘力、調査力、資料の解釈・分析力、ものごとを自分なりに考え、新たなものを創造し、表現する力、また自分で導き出したものや創造したものを人前で発表する力、質問や批判に答え、他者と対話する力が養われたかを確認する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目	学部 共通科目	入門講義（現代文化）	現代文化コースの諸専攻は、現代文化を深く理解し、その中でよりよく生きていくための、知恵を学んでいく。人間が作り上げ、現代に受け継がれ、また、いままさに現代進行形である、さまざまな思考、文化、また、情報のあり方、そうした現代を生きる我々に直接にかかわる様々な知識を習得していくための基本的なものの見方を習得してもらうことを目標とする。この授業は、複数名の担当教員により連携して運営し、学生を含めて各々の立場から現代文化についての統合的議論を行う。 （オムニバス方式／全15回） （74 宇佐美一博／3回）東アジア文化の特徴、古典、文化交流史の紹介。 （25 下野正俊／3回）「西洋的発想」のパターンと、明治以降の日本への受容。 （53 山本昭／3回）現代的事項の情報学的な見方。 （37 吉野さつき／2回）アートと現代文化。 （55 上田謙太郎／1回）メディアとアート。 （74 宇佐美一博・25 下野正俊・37 吉野さつき・53 山本昭／1回：共同）第8回目に中間的な振り返りと今後の授業進行に関する方向性の確認を行う。 （74 宇佐美一博・25 下野正俊・55 上田謙太郎・53 山本昭／2回：共同）第1回目は、自然科学・社会科学・人文学の方法論、観察、抽象化、理論化、演繹と帰納に関する話をし、最終回は授業の総括を行う。	オムニバス方式・共同（一部）
		入門講義（社会学）	社会学とは「社会」についての学問である。人は生きていくなかで必ず社会の影響を受ける。したがって社会とは、身の周りからはじまり、家族、学校、地域、日本という国、世界の国々まで含め、人間社会の全体まで広い範囲を指す。社会学は、一方で個人の行為の分析をとおして、人間と社会を理解しようとするとともに、他方では社会そのものが個人に及ぼす影響力を解き明かす学問である。この授業では、社会学の基礎的視座を学んだ上で、さまざまな社会現象を考えるための視点を習得することをめざす。	
		入門講義（心理学）	心理学の学問体系を全般的に概説する。そこで、心理学における基礎的な内容を中心に説明していく予定である。心理学については、現代において様々な分野があげられる。たとえば、基礎心理学として位置づけられる感覚・知覚、学習、行動、生理心理学の領域から応用心理学として位置づけられるパーソナリティ、社会、発達、臨床心理学等が該当する。この授業では、心理学研究法の基礎を始め、主にパーソナリティ・発達・臨床・認知・学習心理学等の基礎的な内容について学ぶことを目標とする。	
		入門講義（歴史・地理学）	歴史学や地理学の学習・研究を進めるための入門として、教員が交代で、研究の最先端において課題として示され、学生が興味をおぼえると思われるテーマを選んで講義を行う。さまざまな問題に踏み込んで、これまでの研究の成果や、研究を進めるための方法などについて、具体的な事例や史料をもとに提示する。 （オムニバス方式／全15回） （4 廣瀬憲雄／2回）日本古代史にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。 （5 山田邦明／1回）日本中世史にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。 （3 神谷智／2回）日本近世・近代史にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。 （2 小野賢一／2回）世界史（西洋史）にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。 （7 長井千秋／3回）世界史（東洋史）にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。 （6 近藤暁夫／5回）地理や地理学にかかわる特徴的なテーマや事例をもとに講義を行う。	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	学部共通科目	入門講義（日本語日本文学）	日本語はどのような言語であろうか。また日本文学にはどのような特色が見られるのだろうか。そのような問題に答えながら、読解・理解力を身に着け、日本語の表現力を培うことを目標に講義を行う。古代から現代までの文学作品や文字資料を読み、実際の表現を分析的に捉えつつ、日本語日本文学研究の世界へと受講生をいざないたい。特に言語感覚を磨き、日本語表現のスキルアップを望む受講生の期待にも応えうる、実践的・参加型の講義を目指す。 （オムニバス方式／全15回） （38 和田明美／7回）日本語の表現、言葉の意味、言葉と心、日本語の成立など、日本語について考える。 （41 藤井貴志／7回）村上春樹作品の中の音楽（ジャズ）、武者小路実篤「友情」、川端康成「伊豆の踊子」、伊藤左千夫「野菊の墓」などの作品を通じて、日本近現代文学について考える。 （38 和田明美・41 藤井貴志／1回：共同）第1回目の授業において、この授業と日本語日本文学に関するガイダンス。	オムニバス方式・共同（一部）
		入門講義（欧米言語文化）	この授業では、欧米言語文化コースの概要と研究対象を知ることによって、各言語の背景にある「世界」を感覚的に理解し、知的に体感する。 （オムニバス方式／全15回） （18 片岡邦好／3回）英語の歴史、世界各地の英語、様々な社会の英語、英語拡散の是非、国際語としての英語について考察を行う。 （30 永瀬美智子／2回）イギリスの文化、アメリカの文化に関する考察を行う。 （20 河合まゆみ／5回）映像を取り入れながら、ドイツ語圏の歴史・文化に関する考察を行う。 （49 中尾充良／5回）フランス映画の鑑賞をしながら、フランス語の歴史と広がり、フランス映画の歴史等を紹介する。	オムニバス
		入門演習（東アジア文化）	本演習では、現代文化に関わるいくつかの興味深いテーマを選び、東アジア文化の一端に触れることを試みる。また、東アジア文化の研究に必要な基礎知識や漢文資料の読解力を身につけることも目標にする。具体的には、漢字の歴史やしくみについての理解を深め、故事成語を題材に漢語・漢文による資料を講読できる能力を修得していく。同時に、今後の学習に必要な、資料収集、プレゼンテーション・討論、レポート作成といった基礎的なアカデミック・スキルズを習得する。	
		入門演習（哲学）	哲学の初歩を学習する。テキストを精確に読解することは、哲学を学ぶ上で必須の技能の一つである。本演習は、比較的平易な（しかしきわめて重要な）テキストであるデカルトの『方法序説』を題材に、テキスト読解の訓練をする。その上で、以下を目指す。 1 西洋哲学の発想・概念に親しむこと。 2 西洋近世哲学に関する哲学史的な知識の基礎を獲得すること。 3 大学で学ぶ上で必要な、資料収集、プレゼンテーション・討論、レポート作成といった基礎的なアカデミック・スキルズを習得すること。	
		入門演習（図書館情報学）	本演習では、図書館及び情報の社会的関連性を材料に情報収集法、文献探索法を理解し、グループ討議を通して、現代の情報社会の課題と解決法を考察する。そのために、まず講義と基礎的文献の紹介、読解を適宜織り交ぜつつ知識の拡充を図る。このことを通して、図書館情報学の学習に際して今後必要になる基礎知識を獲得する。同時に、さらに学習を進めていく上で必要な、資料収集、プレゼンテーション・討論、レポート作成といった基礎的なアカデミック・スキルズを習得する。	
		入門演習（メディア芸術）	メディア芸術専攻では、ワークショップ（参加体験）型の実習授業を中心に、自らの体験を通して映像と身体表現を中心としたアートを知り、アートマネジメントやアートと社会の関わりについて考える力を養う。さらに、映像と身体を中心とした表現メディアの可能性を知り、アートとさまざまな異領域をつなぐデザインやプロデュースに必要とされる知識、能力を身につける。本演習は以上のような専攻の教育目標に対する基礎科目であり、今後多面的に展開されることになる実習を効果的に学習するための基礎的な知識とスキルを獲得することを目指すものである。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	学部共通科目	入門演習（社会学）	日常生活は、他人とのさまざまな関係で営まれている。人と人との多様な結合によって、社会は形成されている。社会について考えるため、社会学では多くの概念や学説を考案しているので、社会学を学ぶには、基本的な社会学用語や体系化された学説を知らなければならない。そこで、「入門演習（社会学）」では、身近な社会現象を取り上げ、人間関係の諸特性を社会学の観点から論議しながら、社会学の基本的な考え方を身につける。具体的には、家族・地域・文化・コミュニケーション・ジェンダー・福祉等々、さまざまなテーマについて学習する。	
		入門演習（心理学）	心理学の全般的な学問体系について、演習を通じて概説することを目的とする。そこで、心理学のなかで、主に臨床心理学（うつ病の考え方等）、社会心理学（囚人のジレンマ、社会的信頼、コミュニケーション等）、パーソナリティ心理学、実験心理学（比較心理学、認知機能、記憶、音声コミュニケーション等）の基礎的な内容について学ぶことを目標とする。そして、簡易な実験やワークを通じて体感することによって、上記の心理学の内容について理解を深めることを目標とする。	
		入門演習（日本史学）	日本史の研究を進めるうえで、いちばんの基礎になるのは、文書（古文書）や日記を中心とする文献史料である。対象となるその時代に記録された文献は、当時の社会の現実をとらえるときの、なによりの拠り所になるが、こうした文献の記載内容を正確に読み取るのは簡単ではない。この入門演習では、初年度の学生にも理解しやすい文献史料を提示し、その音読と内容の読解を学生に行わせることにより、史料を読み解く基礎的な能力を養う。 （オムニバス方式／全15回） （4 廣瀬憲雄／5回）日本古代史にかかわる文献史料（テキスト）を用意し、演習を行う。 （5 山田邦明／5回）日本中世史にかかわる文献史料（テキスト）を用意し、演習を行う。 （3 神谷智／5回）日本近世・近代史にかかわる文献史料（テキスト）を用意し、演習を行う。	オムニバス方式
		入門演習（世界史学）	2年次からの専門教育の準備として、外国史に関わる研究の方法と事例について、学生グループによる共同作業を行う。グループごとにテーマにしたがい、レジュメ作成、口頭報告を順次行う。 （オムニバス方式／全15回） （2 小野賢一／8回）西洋史分野を中心にグループごとに、例えば「ペルシャ戦争」「ローマ帝政」「百年戦争」「ナポレオン」「ヒトラー」などのテーマについて調査・検討をし、その結果を口頭発表する。 （7 長井千秋／7回）歴史学の入門書をテキストとして、歴史学という学術の特徴と性格、史料、歴史認識、歴史教育、歴史研究の目的などのテーマについて、前半と同じくグループによるレジュメ作成、口頭報告を行う。	オムニバス方式
		入門演習（地理学）	地理学に関係する内容を中心に演習・実習を行う。まずは自分たちが学ぶキャンパスの「地理」と「歴史」を簡単なフィールドワークを通して理解する。その上で、地理学や歴史学の研究において必須となる地図の読解力を簡単な実習で養いつつ、最新のデジタル地図についても理解を深める。さらに、地図を実際に描画してみる。最後には、自分が選んだ地域にかかわる地域資料をまとめ、紹介する演習形式の発表を行う。これらを通して、地理学の基礎的な問題関心と方法論を理解し、2年次以降の専門的な学修への下地を構築する。	
		入門演習（日本語日本文学）	日本語日本文学研究入門としての演習であり、日本語と日本文学に分かれてそれぞれの研究の基礎的な内容を目指す。日本語学については、なにげなく使われている日常の言葉について考察・分析し、言葉の変化や話し言葉のゆれ、あいまいな若者言葉などの探求を通して日本語研究の方法を身につける。日本文学については、江戸川乱歩や川端康成、谷崎潤一郎、泉鏡花、澁澤龍彦といった作家を取り上げ、明治・大正から現代にいたる幻想文学に描かれた「人形」あるいは「人形的なもの」を鍵にして、近代文学を論理的に読解する技法を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	学部共通科目	入門演習（欧米言語文化）	この授業は、欧米言語文化コースの 3 つの専攻に関連する言語や文化に触れつつ、その研究分野を学ぶことを目的とする。 （オムニバス方式／全 15 回） A クラス （20 河合まゆみ／3 回）グリム童話を題材として映画化、オペラ化等に関する考察を行う。 （59 コレヤアントニー／4 回）フランスの歴史、フランスと日本の関係、世界のフランス語圏の国々、フランスの日常生活、フランス語の未来と問題等に関する考察を行う。 （57 エイプリルイヴデイ／8 回）国際英語の視点から英語を学習する意味・目的等に関する考察を行う。 B クラス （27 鈴木康志／4 回）身の周りのドイツ語、ドイツの音楽（クラシックと現代のポップス）、ドイツの街並みと環境政策に関する考察を行う。 （57 エイプリルイヴデイ／7 回）国際英語の視点から英語を学習する意味・目的等に関する考察を行う。 （59 コレヤアントニー／4 回）フランスの歴史、フランスと日本の関係、世界のフランス語圏の国々、フランスの日常生活、フランス語の未来と問題等に関する考察を行う。	オムニバス方式
	演習科目	歴史・地理学演習Ⅰ	歴史学・地理学を学び、自らが創造的な研究を行うための能力を養うために、テキストの読解や書物の精読、資料の分析などを学生自身が行う演習を設定する。常勤教員 7 名が自身の専門分野に基づく演習形式の授業を開き、学生は 7 つの演習のいずれかに参加して学習を進める。日本史学専攻（3 つの演習を設置）では、歴史研究のための基本史料となる編纂史料や文書（古文書）などをテキストにして、その読解を進める。世界史学専攻（2 つの演習を設置）では、専門書籍の精読などによって、学生自身が課題を設定し研究を行うための基礎的能力を養う。地理学専攻（2 つの演習を設置）では、地図や空中写真などの資料から地上の情報を読み取り、それを編集・分析する技能などを習得させる。	
		歴史・地理学演習Ⅱ	「歴史・地理学演習Ⅰ」を継承し、テキストや書物の読解、資料の分析などを引き続き進める。常勤教員 7 名が自身の専門分野に基づく演習形式の授業を開き、学生は 7 つの演習のいずれかに参加して学習を進める。日本史学専攻（3 つの演習を設置）では、歴史研究のための基本史料となる編纂史料や文書（古文書）などをテキストにして、その読解を進める。世界史学専攻（2 つの演習を設置）では、専門書籍の精読などによって、学生自身が課題を設定し研究を行うための基礎的能力を養う。地理学専攻（2 つの演習を設置）では、地図や空中写真などの資料から地上の情報を読み取り、それを編集・分析する技能などを習得させる。	
		歴史・地理学演習Ⅲ	「歴史・地理学演習Ⅰ・Ⅱ」で学んだことがらを基礎としながら、テキストや書物の読解、資料の分析などをいっそう積み重ね、学生の研究能力を養う。常勤教員 7 名が自身の専門分野に基づく演習形式の授業を開き、学生は 7 つの演習のいずれかに参加して学習を進める。日本史学専攻（3 つの演習を設置）では、歴史研究のための基本史料となる法制史料や日記などをテキストにして、その読解を進め、文献史学研究の方法論を習得させる。世界史学専攻（2 つの演習を設置）では、書物の精読などによって歴史にかかわる知識を養い、自ら論文をまとめるための研究方法を習得させる。地理学専攻（2 つの演習を設置）では、学生自身の研究課題にかかわる先行文献の読解などにより、卒業論文につながる実践的な能力を習得させる。	
		歴史・地理学演習Ⅳ	「歴史・地理学演習Ⅲ」を継承し、テキストや書物の読解、資料の分析などを進めて、学生の研究能力を養う。常勤教員 7 名が自身の専門分野に基づく演習形式の授業を開き、学生は 7 つの演習のいずれかに参加して学習を進める。日本史学専攻（3 つの演習を設置）では、歴史研究のための基本史料となる法制史料や日記などをテキストにして、その読解を進め、文献史学研究の方法論を習得させる。世界史学専攻（2 つの演習を設置）では、書物の精読などによって歴史にかかわる知識を養い、自ら論文をまとめるための研究方法を習得させる。地理学専攻（2 つの演習を設置）では、学生自身の研究課題にかかわる先行文献の読解などにより、卒業論文につながる実践的な能力を習得させる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	演習科目	歴史・地理学演習Ⅴ	「歴史・地理学演習Ⅰ～Ⅳ」で学んだ基礎的能力に基づきながら、学生が自身で研究テーマを設定し、先行研究の整理・検討や、テキストの読解や資料の分析などを進めて、内容のある卒業論文を作成するための準備を行う。常勤教員 7 名が自身の専門分野に基づく演習形式の授業を開き、学生は 7 つの演習のいずれかに参加して学習を進める。日本史学専攻（3 つの演習を設置）では、学生が各自のテーマに基づいて先行研究や関係する史料を読み解きながら研究を進め、その成果を発表して議論を重ねる。世界史学専攻（2 つの演習を設置）では、学生が自身で設定した課題にかかわる報告を行い、卒業論文の内容を絞りこむ。地理学専攻（2 つの演習を設置）では、学生が自身のテーマに基づいてデータの収集・分析や現地調査などを行い、その成果を報告して卒業論文につなげる。	
		歴史・地理学演習Ⅵ	「歴史・地理学演習Ⅴ」を継承し、学生が自身で研究テーマを設定し、先行研究の整理・検討や、テキストの読解や資料の分析などを進めて、内容のある卒業論文を作成するための準備を行う。常勤教員 7 名が自身の専門分野に基づく演習形式の授業を開き、学生は 7 つの演習のいずれかに参加して学習を進める。日本史学専攻（3 つの演習を設置）では、学生が各自のテーマに基づいて先行研究や関係する史料を読み解きながら研究を進め、その成果を発表して議論を重ねる。世界史学専攻（2 つの演習を設置）では、学生が自身で設定した課題にかかわる報告を行い、卒業論文の内容を絞りこむ。地理学専攻（2 つの演習を設置）では、学生が自身のテーマに基づいてデータの収集・分析や現地調査などを行い、その成果を報告して卒業論文につなげる。	
	基幹科目	歴史・地理学特殊講義 A	最新の研究成果を交えながら、5 世紀から 12 世紀に至る日本古代史の基本的な論点を概説する。中学・高校の教科書で習う日本古代史の基本的な論点の中には、十分な説明がなされていないため、そのままでは理解が難しいものや、教科書には反映されていないが、その後の研究の進展により理解が改められているものも存在する。この授業では、これらの論点を最新の研究成果を交えながら概説することで、日本古代史に対する理解を深めることをめざす。	
		歴史・地理学特殊講義 B	平安時代の末期から戦国時代までの、500 年ほどの間は、一般に「中世」とよばれる。現代と比べてみると、貴族や武士、僧侶などが支配者として幅をきかせているなど、社会の構造はかなり異なるが、当時の人々の行動を見てみると、現代の人とさほど違わないように思えることもある。この講義では、具体的な史料に基づきながら、天皇・貴族・武士・民衆といったさまざまな階層の人々の生活や、ものの考え方に迫り、政治のありかたや交通事情などに注目しつつ、社会の仕組みを探る。また、尾張や三河などの事例を示すことにより、この地域の特質にも迫る。	
		歴史・地理学特殊講義 C	高校での日本史は、中世史と近世史と近代史をそれぞれ別の時代として考え、教えられているように思われる。ただこれは一応政治史上における区分であり、経済史・社会史・文化史等の他の分野史においては、その区分では説明できないことが多々ある。この講義では、15 世紀後半（室町時代後期・戦国時代）から 17 世紀半ば（江戸時代前半）、17 世紀半ば（江戸時代後半）から 19 世紀（明治 20 年代）、20 世紀（明治 30 年代から 1980 年）の 3 つの時代区分をもとに、経済史・社会史・文化史からみて、その時期においてどのような連続性・共通性が存在し、かつ各時期にどのような変化・差異性があつたかを考えていく。	
		歴史・地理学特殊講義 D	東地中海を舞台として展開された、東（オリエントの西アジア文明）と西（オクシデントのギリシア文明）との文化交渉の歴史を、ポリス世界、ペルシャ戦争、ヘレニズム文明、ビザンティン帝国、ギリシア独立革命などに注目しながら、古代から近世までたどり、現代世界の基本構造に関する新たな視点を学ぶ。歴史学の基本である論理的な思考力と、世界史の幅広い教養、そして現代世界の歴史的な深層への洞察力を習得できるようにすることを目的としている。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	基幹科目	歴史・地理学特殊講義 E	世界史の教科書に登場するイギリスのリチャード獅子心王やジョン・クランド王は、英語ではなく、フランス語を用いてコミュニケーションを行っていたという。それは、何故だろうか。このような疑問を解くために、イギリスとフランスの関係を中心に、ヨーロッパ中世社会の独特のコミュニケーションのあり方を学ぶ。ヨーロッパ中世の社会システムは、11～13世紀の神聖ローマ帝国皇帝とローマ教皇という二つの普遍的権威のコミュニケーションを軸とした二元的世界から、14～15世紀の英仏などの諸地域を包摂する多元的世界へと展開する。政治史、社会史、文化史のそれぞれの領域から多面的に考察し、従来の一国史観とは異なる視点から、中世ヨーロッパの社会システムの実態を明らかにしたい。	
		歴史・地理学特殊講義 F	軍事史研究は、日本における歴史学研究においては比較的手薄な分野であり、それは外国史研究において顕著である。本講義では、まず軍事史研究の重要性と意義を指摘し、続いて中国宋代（10～13世紀）を題材にして、兵站補給の観点からする軍事制度の事例研究を行う。取りあげるテーマは、国家財政と軍事支出、北宋の禁軍体制と南宋の大軍体制、各兵種の任務分担、総領所体制、兵士の給与、行塩区と兵站業務などである。これらの事項を検討することにより、中国の前近代国家の特質、唐宋変革の意義、宋朝国家の性格が明らかとなるであろう。	
		歴史・地理学特殊講義 G	主に自然地理学や歴史地理学の観点から、地表面に展開する諸事象の相互関係について講義し、現代社会の諸相を捉える視点を養う。自然環境と人間活動の関係、ならびにその関係の歴史を問うという、19世紀のフンボルト以来蓄積されてきた地理学の視点は、21世紀の「持続可能な社会」を考える上でますます重要になっている。本講義では、気候や水、地形などの自然環境の要素や、それを下敷きに営まれてきた人間の諸活動の展開とその歴史について多様なテーマを取り上げ、自然と社会の関係性と地域性を地理学的観点から習得することを目指す。	
		歴史・地理学特殊講義 H	主に文化地理学や村落・都市地理学の観点から、地表空間において人間が織りなしてきた諸事象について、空間的（地理学的）に把握し、その自然的・社会的・文化的背景を考察することにより、総合的に地域を捉えることのできる視点を養成する。人間は、自然環境や文化環境の中で、自らの行動を選択し、土地に刻み付けてきた。今日捉えられる村落や都市の空間構造を、それらの成果として捉える視点が大切であり、また、それらが抱えている諸問題も、広く歴史的・地理的視点を取り入れることでより把握しやすくなる。本科目では、文化や都市、人の移動や観光などについて幅広い事例をもとに講義し、今日の社会が抱える問題を地理的な観点から理解する力量の習得を目指す。	
		日本史学講読 A	撰関期の代表的な日記である、藤原行成の『権記』を読み進める。日本古代史の基本的な史料は、編纂史料（正史類）・法制史料（律令格式）・記録史料（古記録）の三種類である。このうち記録史料は、古代史に限らず、中世史・近世史・近現代史においても重要な史料である。この授業では、記録史料を読み進めることを優先するので、演習のように受講生に報告を求めることはしないが、理解には撰関期の政務・儀式等に関する知識が必要となるので、適宜解説を加えながら進めていく。	
		日本史学講読 B	歴史研究の素材である文献史料の中心となるのは、その時代に書かれた文書（古文書）や日記などであるが、しばらく後に記録された史書や軍記なども、歴史研究に活用することができる。このような史書や軍記は、文書などに比べて読みやすく、古い時代の日本語の表現を学ぶ素材としても適切なものといえる。この授業では、南北朝時代に成立した『太平記』をテキストとし、文章を音読して書かれた内容を読み取るという作業を積み重ねて、中世の記録史料を読み解く能力を養う。また、内容を読み解く作業の中で、中世という時代の人々の動きや社会のありようにもふれ、歴史的知識を身に付けるよう導く。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	基幹科目	日本史学講読 C	歴史研究のうち、文献史学という方法を採用する場合、原史料にあたり、自ら解読できることが必須条件となる。活字史料でも研究はできるが、その活字史料とは一部字が異なった写本（異本）や、書写間違い、翻刻の読み間違いもあり、必ずしも活字史料がすべて正しいとは限らない。そのため最終的に原史料にあたらずるをえない場合がある。その意味でとくに、文献史学の場合、「草書体」といわれる文字を基礎知識として修得しておくことは、どの時代を研究するにおいても、後々非常に役立つ。ここでは初歩・入門編として、「草書体」と呼ばれる文字のうち、比較的平易といわれる近世文字を読んでいくことにより、この文字の世界に慣れ親しむことを目標としている。	
		世界史学講読 I	西洋史分野を希望する学生用の英語クラスと主としてアジア史を希望する学生用の漢文（古漢語）クラスに分かれて行う。中等教育段階の学習内容の英語・漢文の語彙、文法知識などの初歩的な読解能力の確認と再学習をおこない、外国語文献に慣れること、歴史学研究においては史資料の内容理解が必須であることを体験することが目標となる。さらに高等教育の教養教育段階で求められる基礎的語彙と文法規則についても導入教育をおこない、英文・漢文読解能力の基礎を学ぶ。	
		世界史学講読 II	「世界史学講読 I」と同様クラスを編成する。初歩的な読解力の達成、定着をうけて、基礎的読解力の養成を行う。英語・漢文について基礎的な語彙と文法知識を理解・獲得し、同時に各種の辞書・辞典、地図、年表など歴史研究の補助文献（工具書）を紹介し、その利用法を学ぶことにより、高等教育の教養教育段階で要請される外国語文献の読解能力を底上げすることが目標となる。ここでは、外国史研究における史資料利用方法の実践的な手法の基礎を体験し、文献読解のためには言語・文字にとどまらず地図、年表その他から得られる情報も必要とされることを学ぶ。	
		世界史学講読 III	「世界史学講読 I・II」と同様クラスを編成する。基礎的な語彙力、文法知識の学習をうけて、その定着をはかり、高等教育の専門課程で求められる発展的な読解力の養成を行う。次年度の卒業論文の作成にあたって、外国語文献の 1 次資料・2 次資料を検索、引用、読解するためのスキルを学ぶ。テキストも、これまでの一般向け文献、概説書レベルのものから専門家向け、研究論文や研究書レベルのものとなり、必要とされる語彙力、文法知識もやや高度なものである。実際の学術研究での引用と解説の実例なども織り交ぜながら行う。	
		世界史学講読 IV	「世界史学講読 I・II・III」と同様クラスを編成する。外国語文献の発展的な学習成果の定着とさらにその応用能力の育成を行う。卒業論文の作成を念頭にいた「世界史学講読 III」での発展的な学習内容は高度であるため、応用能力の育成は行うものの、実際の授業においては「世界史学講読 III」での学習内容の定着が中心となる。専門的な内容の複数の異なるテキストを、これまで学んだ語彙力と文法知識を駆使することにより読み解き、また辞書、地図、年表などの補助文献を自在に利用することにより、文献に記されている事項を複数の観点から立体的にとらえることができるようになることが目標である。	
		地理学講読	地理学の基礎的な研究の心構え、地理学の考え方や問題設定、地理学研究で用いられる調査・分析の手法など、地理学研究の諸段階と論文の書き方について、優れた既往論文を読み解くことで学びつつ、「地理学とはどのような学問であるのか」「地理学を習得することでどのように社会に貢献しうるのか」といったことがらについて考えていく。この目的を達成するため、日本語外国語を問わず、地理学の専門学術誌に掲載された高水準の論文を精読する。	
		地理学フィールドワーク実習	本科目では、地理学の研究法を中心に、「野外科学」としての地理学の精髓ともいわれるフィールドワークについて、基礎的な実習・演習ならびに実際にフィールドに出て調査等を行うことにより、理解と習得をめざす。具体的には、各自がテーマに応じてフィールドでの調査等の経験値を積むことで、フィールド調査における「問題設定」「適切なフィールドの選定方法」「調査の立案と準備の方法」「フィールドでのノウハウ」「フィールドで得たデータの分析と表現」など、地理学の研究に必要な力量を獲得する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	基幹科目	地域分析	地域の現状や課題を把握するための地理的な各種情報の収集ならびに処理・分析方法の学習を行う。その上で、この学習を応用して、受講生各自が自身の興味関心のある地域について科学的視点から分析・検討することができるようになることを目指す。具体的には、各種統計の取得・加工の方法、アンケート調査や統計等の二次的分析の方法、GIS（地理情報システム）を用いた分析と主題図の作成法など各種実習を通して、各種地域情報をもとに地域を把握し分析する、地理学に必要な空間的思考を学んでいく。	
		地図学	地理学の研究において必須であるとともに、歴史学や社会学においても重要な表現媒体（もしくは分析対象）である「地図」について、総合的に学習する。内容は大きく「地図の読み」と「地図の表現」に分かれる。「読み」については、原始時代から現代までの地図の歴史の講義や地図の文法や表現手法についての講義ならびに各種地図の読解を中心に、基礎的知識の習得を目指す。「表現」については、手描きやプロ仕様の製図ソフトを用いた表現実習（製図実習）を通して、目的に応じた主題図の多様な表現技術の習得を目指す。	
	展開科目	歴史学総論	歴史学の学史と方法論を中心に、歴史学という学問の特質や、その研究方法について総合的に教授する。そもそも「歴史」とは何か、「歴史学」とはどのようなものか、歴史の研究はどういう方法でなされるのかといった根本的な問題について考える。また、古代から現代までの長い時代、そして空間的に広がる世界の諸地域において、歴史の研究がどのようなにされ、史実の探究や叙述にかかわる方法論がいかなる形で変化してきたか、具体的事例をもとに跡づける。 （オムニバス方式／全15回） （4 廣瀬憲雄／2回）日本古代史にかかわる事例を中心として、歴史学の方法や研究の歩みについて講義する。 （5 山田邦明／3回）日本中世史にかかわる事例を中心として、歴史学の方法や研究の歩みについて講義する。 （3 神谷智／3回）日本近世・近代史にかかわる事例を中心として、歴史学の方法や研究の歩みについて講義する。 （7 長井千秋／4回）世界史（東洋史）にかかわる事例を中心として、歴史学の方法や研究の歩みについて講義する。 （2 小野賢一／3回）世界史（西洋史）にかかわる事例を中心として、歴史学の方法や研究の歩みについて講義する。	オムニバス方式
		地理学総論	地理学の学史と方法論を中心に、地理学の考え方や地域を地理的観点から理解する方法について総合的に教授する。講義では、古代ギリシアや中国から続く地理学の歴史について基礎的知識の獲得と、地理学の多様な分野とその問題意識について理解することを目指す。同時に、講義中には、初学者向けに多様な観点から精選した地図や映像など各種メディア・資料を用いて、地域を地理学的に理解・把握する方法とその面白さについて、高等学校での地理や歴史の学修を下敷きに、大学での地理学への関心を高めてもらうことも心掛ける。	
		歴史学史	歴史学の意義及び人類の『歴史観の歴史』について考察する。講義の前半は、歴史学の意義及び歴史と歴史叙述の関係について基本的なことを解説する。後半は、古代から近・現代に至る人類の「歴史観の歴史」について考察する。つまり、古代人の歴史観や、中世のキリスト教的歴史観、近代の啓蒙主義的進歩史観などについて、各時代の代表的な哲学観なども交えながら、基本的なことを概観する。こうした講義全体を通じて「歴史的な物の見方」や人類と歴史の関わりについて総合的に考察する。	
		外国考古学Ⅰ	福建・広東を中心とした東南中国、台湾、そして琉球列島を「東アジア亜熱帯沿海地域」と設定し、東アジア世界における先史文化の中で、どのような特徴があったかを整理する。具体的には、新石器文化を中心に、土器、貝塚、稲作を主な検討項目としてあげて考察する。「東アジア亜熱帯沿海地域」を対象としながら、主に先史時代を扱う考古学資料の分析や解釈の方法を学生に理解させ、自身関心のある時代や地域の研究に反映させるという思考を養う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	展開科目	外国考古学Ⅱ	初期青銅器時代からローマ時代までのギリシア考古学の主要なトピックについて、最新の調査の知見に基づきながら論点を提示し、問題点を検討する。具体的には、初期青銅器時代のギリシア、クレタ島とその宮殿文明、ミケーネ文明の世界、初期鉄器時代のギリシア、大植民時代とポリス、オリュンピアとデルフィ、アテネ民主政の考古学、マケドニア王国の興隆とヘレニズム世界の考古学、ヘレニズム都市ペルガモン、交易用アンフォラの考古学、ローマ帝政期のギリシアについて取り上げる。	
		歴史地理学	過去の地理的空間の復原とその手法について習得する。歴史地理学は、地理学の主要な分野のひとつであるとともに、考古学や歴史学とも深い関係をもつ学際的な学問である。本科目は主に講義形式で実施し、農書や日記等の文書類や、絵図や地籍図に代表される古地図系史料、各種統計や台帳等の定量的分析に用いられる史資料、考古資料や古環境復原の成果をもとに、過去の地理的環境を復原し、同時に各地の地域性を明らかにする歴史地理学の手法とそこから見えてくる歴史的事実について、豊富な実例をもとに学習する。	
		自然地理学	自然地理学は、人文地理学、地誌学（地域地理学）と並ぶ地理学の主要分野である。人文地理学をはじめとする人文・社会諸科学を専攻する者にとっても、人間活動が繰り広げられる舞台となる地表空間上の自然的基礎の理解は不可欠である。本講義では、地表空間を構成する自然的諸要素、すなわち地形や気候、植生、土壌等の成り立ちと地域性、人間活動への影響などについて、自然地理学の視点で学習しながら、自然災害や地球環境問題など、自然環境と密接にかかわる人文・社会的分野についても考察していく。	
		日本史史料学	日本史研究のためには、それぞれの時代に書かれた文献史料についての理解を深め、その内容を読解することが必要となる。この講義では、古代・中世・近世の各時代の組織や個人がその意思を相手に伝えるために作成した古文書（文書）を主な対象として、その形式や機能について考察する。具体的には、古文書の伝来、出土文字史料（木簡・漆紙文書など）、公式様文書、武家様文書（鎌倉時代）、朝廷・将軍（近世）関係文書、幕府・諸藩の文書、近世の禁制・制札、郷村と百姓の文書、寺社・町方の文書について取り上げる。	
		日本考古学Ⅰ	考古学は歴史の資料の一つである物質資料、大地に遺る過去の人間活動の痕跡から、過去の生活や文化を復原する学問である。ただし物質資料はそのままでは混沌・雑然として、何も語るところがない。それは各種の技術的操作を加えてはじめて、単なる材料としての資料から証拠としての史料となるのである。本講義では、日本列島・本土の弥生時代を題材として、この考古資料の史料化の基本的方法についての理解を深めることを目標とする。	
		日本考古学Ⅱ	古代史・考古学ブームの中で、遺跡や発掘調査に対する関心の高まりがみられる。しかし発掘調査によって得られた考古資料に基づいて行われる、考古学の研究活動の実際についてはあまり知られていない。本講義では、古墳時代の具体的問題を材料として、考古学研究の実際についての理解を深めることを目標とする。具体的には、古墳とは何かから始まり、年代や被葬者について言及し、東アジアにおける古墳文化や古墳の出現・展開・終末について学び、最後に愛知の古墳について学んでいく。	
		日本文化史Ⅰ	伝統的な日本文化が崩壊、衰退、推移しつつあるなかで、その存続してきた意味・意義を理解し、現代社会を生きる私たちの生活の参考として、活用発展させる方法、論理を考え、伝統的な日本文化についての知識を習得する。「日本文化史Ⅰ」では生活（食文化、和食、味噌・たまり、和室、墓と埋葬）、産業（茶、漆、石製品、和紙と洋紙、舟運と産業）、交通文化（街道の文化財、寺社参詣、馬と運送、橋と渡船）にかかわるものを三河・尾張の地域文化を主に例にしながら説明する。	
		日本文化史Ⅱ	伝統的な日本文化が崩壊、衰退、推移しつつあるなかで、その存続してきた意味・意義を理解し、現代社会を生きる私たちの生活の参考として活用発展させる方法、論理を考える。「日本文化史Ⅱ」では、武士と支配（刀剣、甲冑、城と石垣、城絵図、寺社建造物）、芸能と祭礼（農耕民俗、山車と人形芝居、三河万歳と尾張万歳、俳諧）、庶民信仰（真宗文化、秋葉信仰等様々な信仰）にかかわる文化を、三河・尾張地域の例を中心にしながら説明する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目	展開 科目	日本民俗学	柳田國男以前、柳田國男の民俗学、柳田國男以後の民俗学の学史を時系列で整理して確認する。学史の中では、年中行事・人生儀礼研究、民俗芸能、民具学などの学問領域を確認し、柳田國男の他、山中共古、宮本常一、折口信夫、南方熊楠、野本寛一、千葉徳爾などの研究業績の確認をする。環境民俗学の研究内容について民俗学の成果を確認する。日本民俗学の学史とその研究動向を把握することができ、環境民俗学の今後について展望を持つことができるようになることが期待される。	
		ヨーロッパ文明史Ⅰ	古代ギリシア・ローマの歴史を概観しながら、今日のヨーロッパが世界のなかでどのような歴史的経緯を経て形成されたのかを学ぶ。現在われわれが一般に言う「ヨーロッパ」は、文明の始まりから時間をかけて緩やかに形成され、およそ中世までにその基礎がうちたてられた。授業ではヨーロッパの内的発展に触れつつも、ヨーロッパと他の世界との交渉にも目を向け、世界史全体のなかでヨーロッパが占めた位置づけを客観的に理解できるようになることが期待される。	
		ヨーロッパ文明史Ⅱ	社会を大きく変えた出来事をキーワードにヨーロッパの歴史を概観する。具体的には、キリスト教とローマ帝国、異民族の侵入、中世ヨーロッパの社会、イスラム社会と十字軍、ルネサンス、大航海時代、宗教改革、産業革命、市民革命、帝国主義と植民地政策、第1次世界大戦、第2次世界大戦について取り上げる。さまざまな側面からヨーロッパの歴史を学ぶことで、ヨーロッパ史の基礎知識はもちろん、現代社会の諸問題に客観的な判断を下す能力が身につくことが期待される。	
		芸術史	西洋美術の歴史を概観する。主要な作品を見ながら、作品の背景となる歴史的状況を考察するとともに、美術作品を通して同時代の思想や社会的背景について考える。具体的には、先史時代、エジプト美術、ギリシア・ローマ美術、中世、中世からルネサンス、イタリア・ルネサンス、イタリア・ルネサンスと北方ルネサンス、バロック、バロックから近代、近代の美術、現代の美術について取り上げる。西洋の美術作品についての基礎知識を得るとともに、美術作品の分析を通じて歴史的視点からの考察力を養うことが目標となる。	
	関連 科目	博物館概論	博物館は生涯学習の中核機関であり、市民活動の拠点として重要である。実際、我々の周囲にはたくさんの博物館が存在しており、さまざまな活動を行っている。この講義では、まず博物館の歴史・制度・種類・機能などの基本を学び、「博物館」とは何かということを理解するとともに、身近な博物館を例にして、それらの設立母体・展示テーマ・規模などに注目することで、多様な博物館の実態を考察する。また関連して、博物館に関わる学芸員と市民が、それぞれの立場から、よりよい博物館と地域作りのために、どのように相互協力していけばよいかを検討していく。	
		教育方法論	教育目的を達成するためには、適切な教育方法・技術を欠くことはできない。本講義では、教育方法・教授法の歴史や理念、授業論、教育評価論等の観点から、実際に授業実践を行うために必要となる教育方法・技術についての基礎的知識を獲得し、教育方法の原理を理解するとともに、学校教育における授業の編成方法、情報機器（ICT）を活用した指導法を身につけることを目指す。また、映像・文献資料および実際の授業の分析を通して、将来教師になった際、子どもの学びをどう捉え、どう支援していくか、について理解を深めていく。	
		社会科・地歴科教育法	「確かな学力」を育むための授業や評価のあり方を理解し、中学校社会科地理歴史的分野および高校地理歴史科の基本的な授業方法を身につける。具体的には、学習指導要領の目標および内容に基づいて年間学習計画・学習指導案を作成し模擬授業を実施する。さらに随時グループワークを通してリフレクションし、授業改善のための客観的視点を身につける。学習指導要領が示す中学校社会科地理歴史的分野・高校地理歴史科の目標および内容を理解し、それぞれの教科・科目において「確かな学力」を育む基本的な授業方法を身につけることが目標となる。	
		社会科・公民科教育法	「確かな学力」を育むための授業や評価のあり方を理解し、中学校社会科公民的分野および高校公民科の基本的な授業方法を身につける。具体的には、学習指導要領の目標および内容に基づいて年間学習計画・学習指導案を作成し模擬授業を実施する。さらに随時グループワークを通してリフレクションし、授業改善のための客観的視点を身につける。学習指導要領が示す中学校社会科公民的分野・高校公民科の目標および内容を理解し、それぞれの教科・科目において「確かな学力」を育む基本的な授業方法を身につけることが目標となる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	関連科目	社会科教育法	「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の（有為な）形成者に必要な公民としての資質・能力（の基礎）」の育成を目指す社会科・地理歴史科教育のための基礎理論及び指導力（教材開発力・授業力など）を主体的・実践的に身に付ける。授業の前半では、社会科・地理歴史科教育の目標論・内容論・方法論などの理論を社会諸科学やこれまでの授業実践の蓄積を背景として学ぶ。後半では、現地調査や資料収集・分析などによる教材開発、学習指導案や教具の作成、教育機器の利用を含む指導法の工夫などによる模擬授業の実施及び研究討議を行い、担当者からのコメントなどによりフィードバックが行なわれる。	
	他学部科目	GIS 概論	GIS（Geographic Information System:地理情報システム）は、地理学や情報技術、地球科学、社会科学、生態学、計測工学など、様々な分野に関わる学際的なシステムである。地理情報とは何か、GIS の概念や歴史、GIS をとりまく現状、GIS の構成要素や機能などの基礎知識を学ぶ。また、自治体や民間企業、研究教育機関など諸分野における GIS の活用事例を紹介し、さまざまな学問分野や地域政策における GIS の活用の方向性を学習する。「地理空間情報高度活用社会」実現に向けて、それぞれの分野や地域において今後どのように GIS を利活用していくか考えられるようになることを最終目標とする。	
		まちづくりとデータ分析	地域の実情に基づきまちづくりを行うには、データの収集や分析が必要不可欠である。本授業では、まちづくりに欠かせないデータとは何か、何故必要なのか、いかに収集し活用するかについての方法や技術を習得する。まず、まちづくりに必要なデータを体系的に確認する。次に、統計資料などの既存データの探し方や、アンケートやヒアリングなど現地調査によるオリジナルデータの集め方の知識を身につける。そして、収集したデータの種類の即した統計処理・分析を行うことで、得られた結果をどのようにまちづくりに生かしていくかについて考える。	
		地域資源論	まちづくりや地域づくりで重要なことは、ハード・ソフト両面の地域資源をいかに発掘し、利活用、管理制御していくかである。空間や場所を扱う学問である地理学の視点に立ち、地域資源とまちづくり・地域づくりとを結びつけるための理念と実情について理解する。地域の風土性を知るとともに、風土性に基づき創られる地域資源の把握方法（認識・点検評価も含む）や、風土産業・地域ブランド化に代表されるような地域資源の有効活用の手法・仕組みを学ぶ。	
		英米の地域と文化	2000 年余の長い歴史を誇り、すばらしい文化を有し、観光大国と言われるイギリスを中心に英米の文化と歴史について概観する。文化の手始めとして大英帝国の歴史を辿りながら、その間にどのような産業や文化が芽生えたかを考察する。その理解の上で、現在のイギリス各地の観光ポイントを考察する。また、アメリカについても、1600 年以降の欧米からの移民と 19 世紀における開拓の歴史を概観し、現在のアメリカがどのような理念のもとに建国されたかを理解するとともに、東部、中西部、西部の観光について考察する。学生の自主的な授業への参加を促すため種々のアクティブ・ラーニングを取り入れ、プレゼンテーション力、企画力、簡単な英語力も身につける。	
		多文化共生論	文化の概念や日本人のコミュニケーションの特質から入り、「日本人らしさと自分」を経験的に分析する。また「〇〇人論」などのステレオタイプのイメージを分析し、ステレオタイプや偏見が起こる原因について探る。さらに、異文化接触によってどのような相互作用がもたらされるか、言語や心理面での軋轢・摩擦・受容のモデルから考察する。最終的に、価値観の相違を考えながら多文化共生に向けて創造的な地域づくりとは何かを探究する。学生の自主的な授業への参加を促すため種々のアクティブ・ラーニングを取り入れ、プレゼンテーション力、批判的思考力、分析力を身につける。	
	教職課程科目	日本史	日本史の基本的な事項を学ぶだけではなく、大学生活をおくる地域社会の歴史・文化はいかなるものであったのかというローカルな視点、東アジア世界からみて日本の歴史・文化はいかなるものであったのかというグローバルな視点など、出来る限り日本史を多面的に考察する。具体的には、先史・古代から、中世、近世、幕末、近代、現代までの日本の歴史の展開を学習し、わが国を取り巻く国際環境などと関連付けて考察する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目	教職 課程科目	外国史	世界の歴史のなかで、資本主義、市民社会や国際関係の基本ルールといった現代世界の枠組みが形作られるうえで大きな影響力をもったのは、近世以降の西ヨーロッパ諸国（イギリス、フランス、ドイツなど）だった。この授業では、そうした西ヨーロッパ諸国が長い歴史を通じてどのように形成されてきたのか、またアジア、アフリカや南北アメリカなど世界の他の諸地域の人々とどのような関わりをもってきたのかについて講義し、知識を身につけるよう導く。より具体的にいえば、西ヨーロッパ諸国の歴史を古代・中世・近世・近現代という時代にわけたうえで、それぞれの時代の大きなトレンド（あるいはモチーフ）とは何であったのかを、各時代の主要なできごとやトピックを取り上げながら説明していく。	
		地理学通論	中学校社会科ならびに高等学校地理歴史科において地理的分野の授業を行う時に不可欠な基礎的知識について講義を行う。教科「地理」に関わる諸事象は『入れ子の箱』の発想で説明できる。すなわち、大枠の自然環境条件（例えば気候）中に土地条件の枠が入り、人間は土地条件の枠内で様々な活動を行う（環境可能論の考え方）。この事例をいくつか（例えば、日本列島の気候の特色、アジア各地と日本の農業の相違）取り上げながら説明し、教科「地理」とその裏付けとなる地理学の理論や成果について基礎的理解を得る。	
		地誌学	中学校社会科ならびに高等学校地理歴史科において地理的分野の授業を行う際には、具体的な地域の状況を伝える技術、例えば地図に描かれている多種類の情報の中から何を生徒に読み取らせるのかについての技術は不可欠といえる。そのためには、教育者の側に地域を総合的な有機体として捉える地誌学の視点を獲得することが求められる。本科目では、東海地方、諸外国の一国など具体的な地域を事例として取り上げ、地形図や各種資料を用いながら、地域を総合的に捉える地誌の実例を講義し、それを通して地誌学的に地域を把握できる力量の養成を目指す。	
		政治学概論	政治は様々な局面をもっている。圧力団体・政党運動・大衆運動などの政治過程、官僚制などの組織、投票行動や世論およびオピニオン・リーダー等の政治意思に関わる局面、第四の権力であるメディアとの密接な関係、さらには現在のようなポスト真実の時代のポピュリズムと政治の関係。民主主義や平等・人権等、現代社会の基本的な価値に基づく政治が、人々の政治意思や参加によって成立していること、経済や科学技術を倫理的にコントロールし、人々の理想を担い、また利害の調整も担うこと等々、原理的な学習を行う。	
		法学概論	公正さや社会正義の基本理念に基づき、現代社会において、法は権力をコントロールする重要な機能を担う。国を単位として構成される現代社会では国の基本的な理念である憲法を中心に様々な法律体系が備えられている一方、国際法等、国を超えて人権を守る法も整備されつつある。さらに、陪審員や裁判員制度のように市民が司法にも参加し、また犯罪や事故に遭った人を積極的に援助する「被害者救済制度」等、法をめぐる変化も起こっている。法は人々の意思によって存続し社会の変化によって新しい法も制定される。法の基本的な考え方や社会との関係を学ぶ。	

学校法人愛知大学 設置認可等に関わる組織の移行表

令和2年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員		令和3年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
愛知大学					愛知大学				
文学部 人文社会学科	290	-	1,160	→	文学部 人文社会学科	172	-	688	定員変更(△118)
文学部 心理学科	55	-	220		文学部 心理学科	55	-	220	
					文学部 <u>歴史地理学科</u>	70	-	280	学科の設置(届出)
					文学部 <u>日本語日本文学科</u>	48	-	192	学科の設置(届出)
経済学部 経済学科	330	-	1,320		経済学部 経済学科	330	-	1,320	
国際コミュニケーション学部 英語学科	115	-	460		国際コミュニケーション学部 英語学科	115	-	460	
国際コミュニケーション学部 国際教養学科	115	-	460		国際コミュニケーション学部 国際教養学科	115	-	460	
法学部 法学科	315	-	1,260		法学部 法学科	315	-	1,260	
経営学部 経営学科	250	-	1,000		経営学部 経営学科	250	-	1,000	
経営学部 会計ファイナンス学科	125	-	500		経営学部 会計ファイナンス学科	125	-	500	
現代中国学部 現代中国学科	180	-	720		現代中国学部 現代中国学科	180	-	720	
地域政策学部 地域政策学科	220	-	880		地域政策学部 地域政策学科	220	-	880	
計	1,995	-	7,980		計	1,995	-	7,980	
愛知大学大学院					愛知大学大学院				
法学研究科公法学専攻(D)	3	-	9	→	法学研究科公法学専攻(D)	3	-	9	
法学研究科私法学専攻(D)	5	-	15		法学研究科私法学専攻(D)	5	-	15	
経済学研究科経済学専攻(M)	15	-	30		経済学研究科経済学専攻(M)	15	-	30	
経済学研究科経済学専攻(D)	5	-	15		経済学研究科経済学専攻(D)	5	-	15	
経営学研究科経営学専攻(M)	15	-	30		経営学研究科経営学専攻(M)	15	-	30	
経営学研究科経営学専攻(D)	5	-	15		経営学研究科経営学専攻(D)	5	-	15	
中国研究科中国研究専攻(M)	15	-	30		中国研究科中国研究専攻(M)	15	-	30	
中国研究科中国研究専攻(D)	15	-	45		中国研究科中国研究専攻(D)	15	-	45	
文学研究科日本文化専攻(M)	10	-	20		文学研究科日本文化専攻(M)	10	-	20	
文学研究科日本文化専攻(D)	2	-	6		文学研究科日本文化専攻(D)	2	-	6	
文学研究科地域社会システム専攻(M)	10	-	20		文学研究科地域社会システム専攻(M)	10	-	20	
文学研究科地域社会システム専攻(D)	2	-	6		文学研究科地域社会システム専攻(D)	2	-	6	
文学研究科欧米文化専攻(M)	10	-	20		文学研究科欧米文化専攻(M)	10	-	20	
文学研究科欧米文化専攻(D)	2	-	6		文学研究科欧米文化専攻(D)	2	-	6	
国際コミュニケーション研究科 国際コミュニケーション専攻(M)	15	-	30		国際コミュニケーション研究科 国際コミュニケーション専攻(M)	15	-	30	
法務研究科法務専攻(P)	20	-	60		法務研究科法務専攻(P)	20	-	60	
計	149	-	357		計	149	-	357	
愛知大学短期大学部					愛知大学短期大学部				
ライフデザイン総合学科	100	-	200	→	ライフデザイン総合学科	100	-	200	
計	100	-	200		計	100	-	200	